

桜井市

平成28年度国庫補助による 発掘調査報告書

大藤原京関連遺跡第65次発掘調査
吉備池遺跡第17次発掘調査
纏向遺跡第189次発掘調査
纏向遺跡第190次発掘調査

2018. 3. 30

桜井市教育委員会

桜井市

平成28年度国庫補助による 発掘調査報告書

2018. 3. 30

桜井市教育委員会

序

私たちの桜井市は奈良盆地の東南部に位置し、市域の約7割を占める山地より流れ出る栗原川、寺川、初瀬川、巻向川等の清流がほぼ東西に横断し、この地に生きる多くの人々に限りない豊かさを与え続けています。

市内には大和川の北側に芝遺跡、纏向遺跡、箸墓古墳、南側には大福遺跡、吉備池廃寺、桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳など全国的にも注目される貴重な文化遺産が多く分布しており、この地域が古代におけるわが国の中心地であったことが知られています。

桜井市ではこのような遺跡を保護し、啓発するための事業のひとつとして市内遺跡の調査・保存に力を入れており、本書には平成28年度に桜井市が国・県の補助を受けて実施した発掘調査のうち大藤原京関連遺跡第65次調査と吉備池遺跡第17次調査と纏向遺跡第189次調査と纏向遺跡第190次調査の成果をおさめております。本報告書によって貴重な歴史遺産に対する理解と愛着を深めていただき、調査した資料が広く活用されることとなれば当教育委員会としても望外の喜びであります。

最後になりましたが、現地調査にあたりまして協力していただいた地主及び地元協力者の方々、指導・助言を頂いた多くの関係諸機関の方々、また、酷暑、極寒のなか作業に従事して頂いた作業員の方々や学生諸君、遺物の整理・報告書の作成に協力して頂いた整理員の方々に深くお礼を申し上げ、序の言葉にかえさせていただきます。

平成30年3月30日

桜井市教育委員会

教育長 上 田 陽 一

例 言

1. 本書は、平成28年度国庫補助事業として桜井市教育委員会が実施した市内遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。本報告書は、大藤原京関連遺跡第65次調査と吉備池遺跡第17次調査と縦向遺跡第189次調査と縦向遺跡第190次調査の成果を掲載している。
2. 調査主体：桜井市教育委員会
教育長 石田泰敏（～平成28年10月8日）、上田陽一（平成28年10月9日～）
事務局長 竹田勝彦
桜井市纏向学術センター所長 寺澤 薫
文化財課長 渡辺芳久、主幹 調査研究係長事務取扱 橋本輝彦
副主幹 文化財係長事務取扱 丸尾 亘
主査 松宮昌樹、福辻 淳、主任 丹羽恵二、技師 森 暢郎、技師補 飯塚健太
臨時職員 木場佳子、三沢朋未、藤村裕美、生島雅美
3. 調査担当者：福辻 淳、丹羽恵二、三沢朋未、藤村裕美
4. 調査補助員：堂浦千景、直木志織、西村知浩、乗本愛実（奈良大学）、平井雅樹（同）
5. 調査作業員：田村則佳、森 貞之、高見 淳、北島 弘、北島奈美子、竹島 満、葛岡孝夫、芝 久善、奥村眞大
6. 整理作業及び報告書作成：上記補助員及び嶋岡由美、吉川晴美、小松令子、太田久仁子
7. 現地調査及び遺物整理に関して以下の機関、団体、個人の方々からさまざまなご指導、ご教示を賜った。ここに記して感謝の意を表します。（敬称略、順不同）
奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所、
奈良文化財研究所都城発掘調査部
大脇 潔、小澤 毅（三重大学）、奥田 尚（奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員）
8. 本書の執筆は各調査担当者がおこない、文末に明記している。編集は三沢がおこなった。
9. 本書における方位・レベルは第2章 第2～4節は世界測地系によるものを示し、第2節については旧日本測地系も並記し、レベルは海拔高を表す。第2章 第1節は未測量のため座標等は記していない。
10. 本書記載の遺物実測図の断面は、土師質のもの－白抜き、須恵質のもの－黒塗り、瓦質・瓦－網目、石器・金属器－斜線とした。
11. 図版の遺物番号は、該当する各節の遺物番号に対応している。
12. 出土遺物をはじめとする調査記録一切は、桜井市教育委員会の管理のもと桜井市立埋蔵文化財センターで保管している。活用されたい。

目 次

第1章 平成28年度の国庫補助による発掘調査	1
第2章 発掘調査の成果	
第1節 大藤原京関連遺跡第65次発掘調査報告	3
第2節 吉備池遺跡第17次発掘調査報告	5
第3節 縦向遺跡第189次発掘調査報告	25
第4節 縦向遺跡第190次(茶ノ木塚古墳第1次)発掘調査概要報告	39
図版	
抄録	

挿 図 目 次

図1 桜井市の位置	1
図2 平成28年度国庫補助による発掘調査地位置図 (S=1/50,000)	2
図3 大藤原京関連遺跡第65次調査地位置図 (S=1/4,000)	3
図4 調査区平面・断面図 (S=1/100)	4
図5 吉備池遺跡第17次調査地位置図 (S=1/2,500)	5
図6 調査区平面図 (S=1/200)	7・8
図7 第1トレンチ東壁断面図 (S=1/100)	9
図8 第1トレンチ北壁断面図 (S=1/100)	10
図9 第2トレンチ平面・断面図 (S=1/80)	11
図10 SX140石検出状況及び横断面 (S=1/20)	12
図11 SX146石検出状況 (S=1/20)	13
図12 SX153石検出状況 (S=1/20)	13
図13 遺構断面図 (S=1/60)	14
図14 出土遺物① (S=1/3、15のみS=1/4)	17
図15 出土遺物② (S=1/3)	18
図16 出土遺物③ (S=1/3、36のみS=1/4)	19
図17 出土遺物④ (S=1/3、47のみS=1/4)	20
図18 調査区と藤原京条坊道路 (S=1/1,500)	22
図19 縦向遺跡第189次調査地位置図 (S=1/4,000)	25
図20 調査区平面・断面図 (S=1/100)	26

図21	落ち込み断面図 (S=1/80).....	27
図22	落ち込み上層出土遺物 (S=1/3、7と8のみS=1/2).....	28
図23	落ち込み中層出土遺物① (S=1/3).....	29
図24	落ち込み中層出土遺物② (S=1/3).....	30
図25	落ち込み中層出土遺物③ (S=1/3、42と43のみS=1/2).....	31
図26	落ち込み下層出土遺物 (S=1/3).....	32
図27	鍛冶関連遺物 (S=1/3、52のみS=1/2).....	32
図28	出土鉄滓① (S=1/2).....	33
図29	出土鉄滓② (S=1/2).....	34
図30	縦向遺跡周辺の古地形復元図 (S=1/20,000).....	36
図31	縦向遺跡第190次調査地位置図 (S=1/4,000).....	39
図32	茶ノ木塚古墳の現況の地形と調査トレンチ (S=1/400).....	41
図33	トレンチ平面・断面図 (S=1/80).....	42
図34	蓋形埴輪 (S=1/4).....	44
図35	蓋形埴輪立ち飾り部推定復元図 (S=1/8).....	45
図36	縦向古墳群における中期～後期古墳の分布 (S=1/15,000).....	46

表 目 次

表1	平成28年度国庫補助による発掘調査一覧.....	2
表2	吉備池遺跡第17次調査 出土遺物観察表.....	24
表3	縦向遺跡第189次調査 出土遺物観察表.....	36
表4	縦向遺跡第189次調査 出土鉄滓一覧表.....	38

図 版 目 次

大藤原京関連遺跡第65次調査

図版1	大藤原京関連遺跡第65次調査(1) 調査前状況(北西より) 調査区完掘状況(北西より) 北壁断面(西より)
-----	--

吉備池遺跡第17次調査

図版2	吉備池遺跡第17次調査(1) 第1トレンチ南北調査区完掘状況(北より) 第1トレンチ東西調査区完掘状況(東より) 第1トレンチ東西調査区と第2トレンチ完掘状況(東より)
図版3	吉備池遺跡第17次調査(2) 第2トレンチ遺構検出状況(北東より)

- 第2トレンチ完掘状況(北東より)
第2トレンチ遺構検出状況(北より)
- 図版4 吉備池遺跡第17次調査(3)
第2トレンチ完掘状況(南西より)
SK105検出状況(南西より)
SK105断面①(南西より)
- 図版5 吉備池遺跡第17次調査(4)
SD106・107完掘状況(南より)
SK117検出状況(北西より)
SK117断面②(南西より)
- 図版6 吉備池遺跡第17次調査(5)
SD103とSK117完掘状況(北東より)
SD137検出状況(東より)
SD137遺物出土状況(北より)
- 図版7 吉備池遺跡第17次調査(6)
SD137断面③(北より)
SD137断面④(西より)
SD139検出状況(東より)
- 図版8 吉備池遺跡第17次調査(7)
SD139馬歯出土状況(真上より)
SD139断面⑤(西より)
SD139とSP143断面⑥(西より)
- 図版9 吉備池遺跡第17次調査(8)
SX140検出状況(西より)
SX140半截断面(南より)
SX146検出状況(北西より)
- 図版10 吉備池遺跡第17次調査(9)
SX153検出状況(南西より)
SD150・162検出状況(西より)
SD150検出状況(西より)
- 図版11 吉備池遺跡第17次調査(10)
SD150・162完掘状況(西より)
SD150断面⑦(東より)
SD150・162断面⑧(東より)
- 図版12 吉備池遺跡第17次調査(11)
SD160断面⑩(西より)
SD170断面⑪(北より)
SD170断面⑫(南より)
- 図版13 吉備池遺跡第17次調査(12)
SK171断面⑬(西より)
SP130・131・133検出状況(北より)
SP156・159検出状況(北より)
- 図版14 吉備池遺跡第17次調査(13)
SP156断面⑨(西より)
SP159断面⑨(西より)
SP172断面⑭(南より)
- 図版15 吉備池遺跡第17次調査(14)
出土遺物①
- 図版16 吉備池遺跡第17次調査(15)
出土遺物②
- 図版17 吉備池遺跡第17次調査(16)
出土遺物③
- 図版18 吉備池遺跡第17次調査(17)
出土遺物④
馬歯

※断面の後の数字は本文中の「各遺構の断面位置図」に対応

縦向遺跡第189次調査

- 図版19 縦向遺跡第189次調査(1)
調査前状況(東より)
調査区全景(北より)
北壁断面(東より)
- 図版20 縦向遺跡第189次調査(2)
南壁断面(西より)
東壁断面(南より)
西壁断面(北より)
- 図版21 縦向遺跡第189次調査(3)
落ち込み断面(南西より)

落ち込み断面（北東より）

落ち込み中層 土器出土状況（南より）

図版22 纏向遺跡第189次調査（4）

出土遺物①

図版23 纏向遺跡第189次調査（5）

出土遺物②

図版24 纏向遺跡第189次調査（6）

出土遺物③

図版25 纏向遺跡第189次調査（7）

出土遺物④

図版26 纏向遺跡第189次調査（8）

出土遺物⑤

図版27 纏向遺跡第189次調査（9）

出土遺物⑥

図版28 纏向遺跡第189次調査（10）

出土遺物⑦

纏向遺跡第190次調査

図版29 纏向遺跡第190次調査（1）

箸中地域の古墳と三輪山（北西より）

調査地全景（上が北）

図版30 纏向遺跡第190次調査（2）

茶ノ木塚古墳と調査トレンチ①

（上が北）

茶ノ木塚古墳と調査トレンチ②

（北西より）

図版31 纏向遺跡第190次調査（3）

周濠上面検出状況（北西より）

葺石石材・埴輪検出状況①（北西より）

周濠埋土完掘後（北西より）

図版32 纏向遺跡第190次調査（4）

葺石石材・埴輪検出状況②（北西より）

葺石石材・埴輪検出状況③（北西より）

周濠埋土断面（北より）

第1章 平成28年度の国庫補助による発掘調査

1. 桜井市の位置と環境

桜井市は、奈良盆地の東南部に位置する人口およそ6万人、面積98.93km²の都市である。市域の北西部は奈良盆地東南部にあたる平野部が広がっており、北東部から東部・南部にかけては大和高原や龍門山地などの山地で構成されている。平野部は、大和川の本流である初瀬川とその支流である寺川をはじめとした河川の堆積からなり、古くから農耕地として利用されてきた。付近は、奈良盆地と宇陀・吉野地域との結節点にあたっており、市内には複数の古道が通っているなど、古くから交通の要衝であったと考えられ、市域には多くの遺跡が分布している。

桜井市内では、いくつかの遺跡から旧石器時代の遺物が出土しており、縄文時代については栗殿遺跡など遺構を伴う遺跡の存在が知られていることから、古くから生活の痕跡を窺い知ることができる。市内で人の活動が活発になったのは弥生時代以降であり、絵画土器を出土した芝遺跡や袈裟標文銅鐸を出土した大福遺跡などが平野部に形成されている。古墳時代前期には纏向遺跡が出現し、出現期古墳である箸墓古墳を含む纏向古墳群が登場する。その他にも、桜井茶臼山古墳やメスリ山古墳といった大型前方後円墳が築造されており、古墳時代後期から飛鳥時代にかけては赤坂天王山古墳や文殊院西古墳といった古墳が多く築造されている。山田寺跡や安倍寺跡、百済大寺と推定されている吉備池廃寺など、大王家や古代氏族と密接な関係をもつ古代寺院がいくつも存在している。このように桜井市には、古代国家の形成期に重要な役割を果たしたと考えられる遺跡が多数みられる。



図1 桜井市の位置

2. 平成28年度の発掘調査

平成28年度に実施した国庫補助による発掘調査は4件である(表1)。このうち、大藤原京関連遺跡第65次調査は個人住宅建設に伴う調査、吉備池遺跡第17次調査は範囲確認調査、纏向遺跡第189次調査は個人住宅建設に伴う調査、纏向遺跡第190次調査は農地造成に伴う調査である。本書では、大藤原京関連遺跡第65次調査と吉備池遺跡第17次調査と纏向遺跡第189次調査の成果を報告し、纏向遺跡第190次調査の成果について概要を報告する。

表1 平成28年度国庫補助による発掘調査一覧

地図No	調査名称	所在地	期間	面積	主な遺構・遺物	担当者
1	大藤原京関連遺跡第65次	山田2028	10月4日	28㎡		丹羽
2	吉備池遺跡第17次	橋本40・41	12月26日～2月18日	364.5㎡	溝、土坑	丹羽 藤村
3	纏向遺跡第189次	巻野内390	1月10日～2月6日	100㎡	落ち込み	三沢
4	纏向遺跡第190次 (茶ノ木塚古墳第1次)	菅中652・653	2月7日～3月3日	26㎡	周濠、墓石、埴輪	福辻 三沢

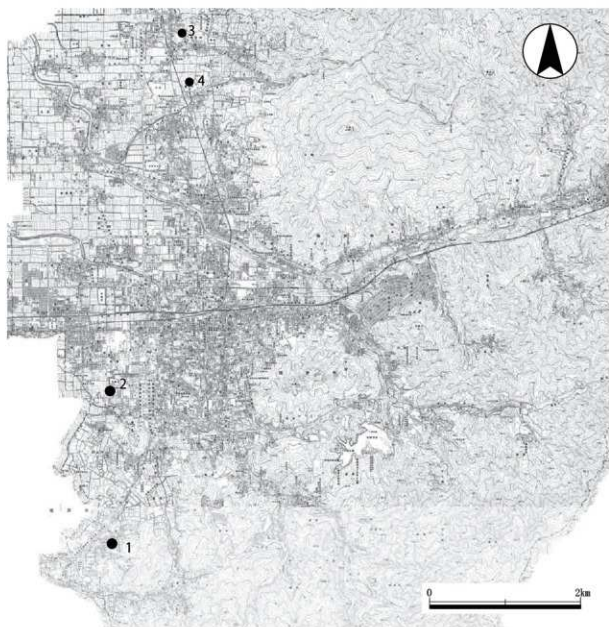


図2 平成28年度国庫補助による調査地位置図 (S=1/50,000)

第2章 発掘調査の成果

第1節 大藤原京関連遺跡第65次発掘調査報告

1. はじめに

大藤原京関連遺跡第65次調査は、桜井市大字山田2028でおこなわれた個人住宅建設に伴う発掘調査である。調査地は、多武峰から北西に派生した丘陵の麓に位置する。今回の開発は、その丘陵から北西方向に伸びる小尾根の頂部を削平し、宅地を造成する計画であったので、尾根上の遺構の有無を確認することが大きな目的であった。今回の調査地は、古代には藤原京域内に位置し、南西には特別史跡である古代寺院の山田寺跡が近接する。また、調査地の北東の尾根上には戒場様古墳群、オスゲ古墳群などの古墳時代後期の古墳群も多く築かれている。このような状況から、これらの遺跡を臨む調査地の尾根上に遺構がある可能性も否定できないため、幅2m、長さ14mの調査区を設定し、遺構の有無を確認した。

なお、調査は平成28年10月4日におこなった。

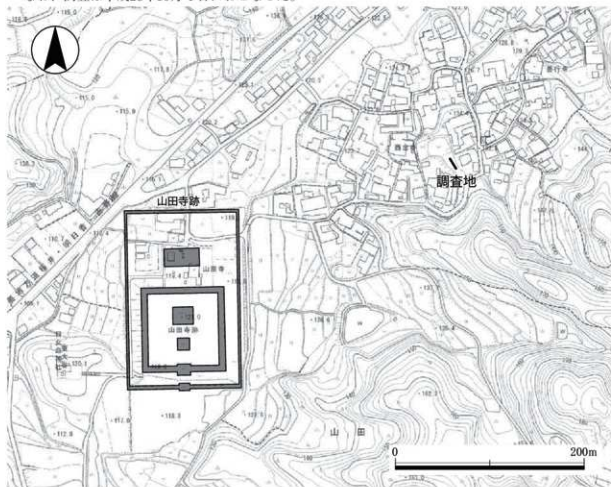


図3 大藤原京関連遺跡第65次調査地位置図 (S=1/4,000)

2. 調査成果

調査地は、地元の人達の話によると以前は地元の公民館があり、それを取り壊し後に畑や駐車場として利用していたようであった。その影響か、掘削前の状況は頂部を平坦に造成していることが読み取れた。

調査は、表土や現代堆積土を重機で除去したあと、人力により遺構の検出を目指した。基本層序は、上から現代の表土である碎石層（図4-1層 層厚約10cm）、現代のごみなどが混じる盛土（3層 層厚20~30cm）、現代の畑作に関わる耕土と考えられる暗灰黄色砂質土（4層 層厚20~25cm）、地山層である花崗岩の岩盤層（5層）の順になる。

地山層上面で遺構の検出を目指したが、畑作に伴うと考えられる凹凸以外はなにも検出できず、遺物もまったく出土しなかった。

3. まとめ

今回の調査では遺構や遺物を検出することができなかった。岩盤層の直上まで、現代盛土や畑作に伴う土層が堆積していたことを考えると、上述した公民館建物建設時に尾根を削平し、造成したことが考えられる。旧地形や旧表土面が残存していないのが残念であったが、山田寺のすぐ北側ということや、調査地の北方の尾根上に古墳が存在していることも考慮すると、今後ともこの周辺の調査は必要であると考えられる。（丹羽）

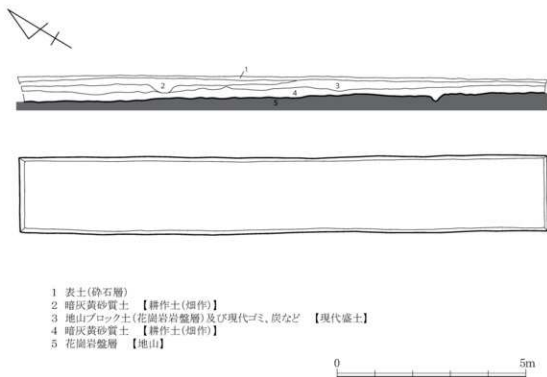


図4 調査区平面・断面図 (S=1/100)

第2節 吉備池遺跡第17次発掘調査報告

1. はじめに

吉備池遺跡第17次調査は桜井市大字橋本40、41でおこなわれた、遺跡範囲確認を目的とした埋蔵文化財発掘調査である。大字吉備、橋本にまたがる吉備池遺跡は、国史跡「吉備池廃寺跡」を中心とした遺跡であり、その史跡の範囲は遺跡の大部分を占める。

吉備池廃寺は、1997年に大字吉備にある吉備池の南東岸でおこなわれた発掘調査により、大規模な金堂基壇の掘り込み地業が確認されて以降、塔、回廊、僧坊や雑坊と考えられる建物群が確認されている。特に塔は、その基壇の規模などから九重塔が建立されたことが想定されている。これらの成果をもとにすると、東に金堂、西に塔を並べ、それらを東西に細長い回廊で取り囲んだ法隆寺式伽藍配置をとり、回廊の規模は、東西約156m、南北約53mと同時代の寺院と比べると突出した規模であっ

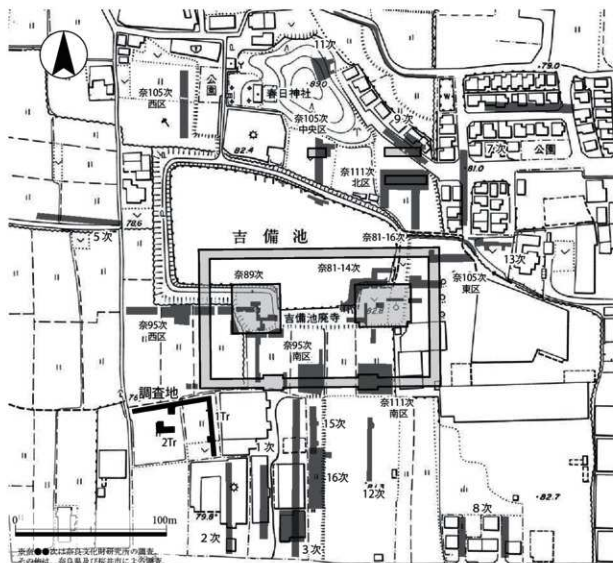


図5 吉備池遺跡第17次調査地位置図 (S=1/2,500)

た。このように大規模な伽藍配置をもつ吉備池廃寺は、舒明天(639年)に建立が始められた日本最初の勅願寺である百済大寺に比定され、主要伽藍を中心とした範囲が、2002年3月に国指定史跡になっている。一方、その寺域は、周辺の調査から東西180m以上、南北260m以上と推定されているだけで、寺域を画する明確な遺構は未だ検出されておらず、確定するに至っていない。

そのような中で、史跡の南西部に隣接する場所で、宅地造成開発の届出が提出された。この場所は、回廊との位置関係から寺域の西限や南限にあたる可能性もあり、史跡範囲の追加を検討すべき範囲であった。そのため、まず遺構の有無を確認する調査が必要であったため、国庫補助金による吉備池廃寺の範囲確認調査をおこなうこととなった。

2. 調査の概要

(1) 調査区の設定と調査方法

まず、敷地の東端に南北30m×東西3mの調査区(第1トレンチ 南北調査区)を設定し、調査をおこなった。その調査区から明確な寺域を示す遺構が検出できなかったため、南北トレンチをさらに敷地の北辺近くまで約10m延ばし、そこからさらに西へ53m調査区を延ばした(第1トレンチ 東西調査区)。その後、東西調査区において、屈曲する溝を検出したため、その遺構の性格を明らかにする目的で、東西のトレンチの一部を南に拡張し、さらに、南側に少し離れた地点に第2トレンチを設定した。調査面積は、第1トレンチで約297.5㎡、第2トレンチで約67㎡の合計約364.5㎡であった。

掘削は、現代表土及び旧耕作土と判断できた層までは重機でおこない、その後の遺構検出や掘削などは人力でおこなっている。遺構掘削については、吉備池廃寺の寺域の確認が最大の目標であったので、正方位の軸をもつ溝や、検出のみでは時期や性格をつかみにくいものに限り掘削した。柱穴や土坑などについては半裁や検出のみでとどめたものも多い。

なお、調査期間は平成28年12月26日から平成29年2月18日までであった。

(2) 基本層序について

調査地全体には、現代耕作土や中世ごろと考えられる旧耕作土層が厚く堆積していた。その耕作土の下は、土器を含まない砂層や砂礫層が全体にみられた。これらの層は、場所により砂粒や礫の大きさが異なるため河川による自然堆積層(地山層)だと考えられる。この地山層を検出した標高は場所によって異なり、調査区内の北東(第1トレンチ北東端)では79.3m、最南端(第1トレンチ南端)では79.0m、最西端(第1トレンチ西端)では78.4mと、特に東西方向で比高差があり、南西側へ低くなる現地形を反映している。

第1トレンチ南北調査区内では、場所によって耕作土と自然堆積層の間に、部分的にブロック土などを含む土壌化した薄い堆積層(図7-29層など)がみられた。その中でもSX104とした29層は、7世紀後半頃の土器が含まれるのを確認しているため、地山層の浅い窪みに堆積したものと考えられる。第1トレンチ東西調査区や第2トレンチ内では、旧耕作土直下に地山である砂礫層が検出されるので、

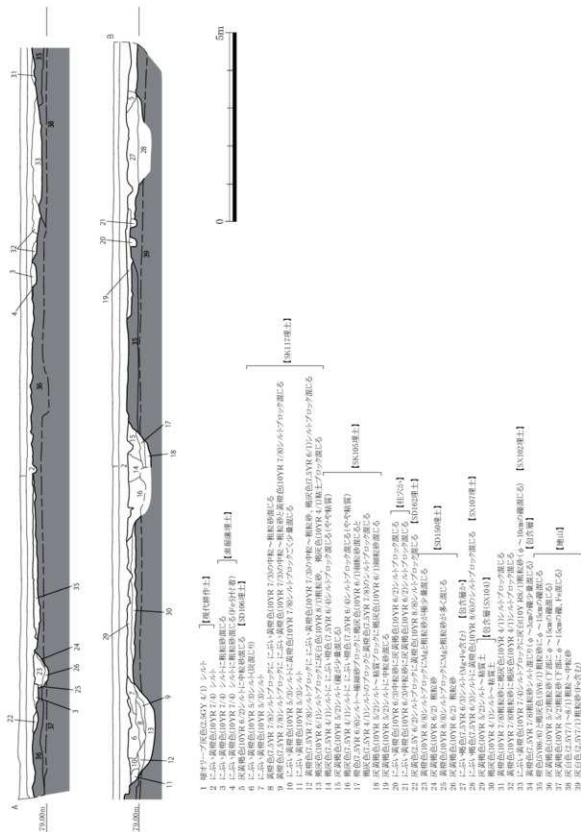
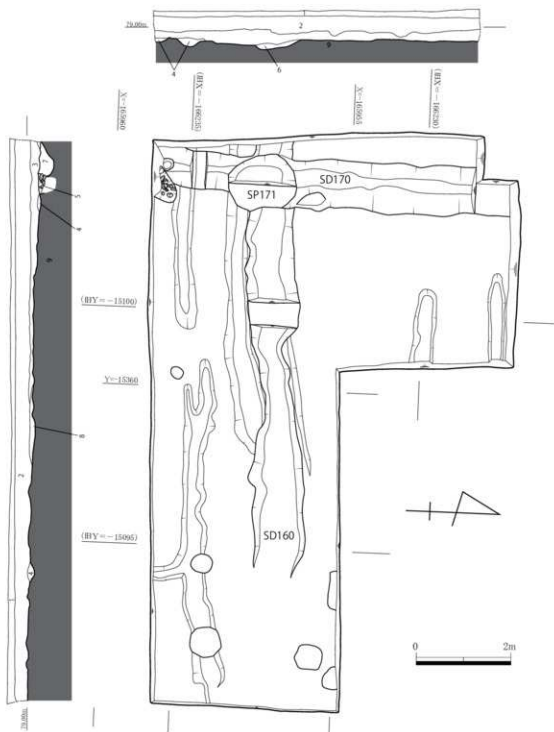


図7 第1トレンチ東端断面図 (S=1/100)



- | | |
|--|-----------|
| 1 暗オリーブ色(2.5Y 4/1)シルト | 【現代耕作土】 |
| 2 にぶい褐色(7.5YR 5/3)シルト | |
| 3 灰色(10Y 6/1)シルト～にぶい黄褐色(10YR 6/4)シルト | |
| 4 灰色(10Y 6/1)シルト～にぶい黄褐色(10YR 6/4)シルトに細粒～中粒砂混じる | 【表層溝埋土】 |
| 5 灰黄褐色(10YR 5/2)中粒砂に粘質土混じる 直径10cm程度の礫が混じる | |
| 6 地灰色(10YR5/1)中粒砂にシルトブロック 直径10cm程度の礫が少量混じる | 【SD160埋土】 |
| 7 地灰色(10YR5/1)中粒砂にシルトブロック 直径10cm程度の礫が少量混じる | 【SD170埋土】 |
| 8 地灰色(10Y R4/1)中粒～粗粒砂 (φ～5cmの礫少量混じる) | |
| 9 灰黄褐色(10YR 6/2)～灰白色(10YR 7/1)粗粒砂に直径10cm程度の礫が混じる | 【地山】 |

図9 第2トレンチ平面・断面図 (S=1/80)

中世の耕作の際に7世紀から8世紀の基盤層がある程度削平を受けていると考えられる。

(3) 主要な遺構について

第1トレンチの南北調査区では、直径2mを超えるような土坑や東西方向の溝、柱穴を検出し、東西調査区では、南北や東西方向の溝、石が詰め込まれた土坑、柱穴などが検出されている。第2トレンチでは第1トレンチで検出した南北溝の続きを確認したほか柱穴などを検出している。以下、主要な遺構についてそれぞれ詳説する。

SD103 第1トレンチ南北調査区の中ほどで検出した東西方向の溝で、幅約1.4m、深さ約20cmである。遺構の東半はSK117により削平され、その痕跡は残っていなかった。埋土からは土師器や須恵器の小片が出土している。

SK105 第1トレンチ南北調査区の中央からやや南寄りの東壁付近、包含層である灰黄褐色シルト層(29層)上面で検出した直径約3mの円形の土坑である。遺構の南半を掘削した。深さは検出した場所で約0.6m、中央部はもう少し深くなりそうである。遺構の東半は調査区外にあたり全容は不明である。その形態から井戸の可能性もあるが確定はできない。後述するSK117と規模、形態とも類似している。埋土からは須恵器や土師器の小片が出土している。

SD106 第1トレンチ南北調査区の南端で検出した幅約0.8m、深さ0.2mの東西方向の溝である。下層の遺構であるSD107の上面で検出した。埋土からは土師器や須恵器の小片が出土している。

SD107 SD106の下層から検出した幅約2.6m、深さ0.3m以上の溝である。正方位に対して、斜行する溝である。埋土からは土師器や須恵器の小片が出土している。

SK117 SD103の埋没後に掘削された土坑である。検出時にはこの二つの遺構埋土の切り合い関係は確認できなかったが、東壁にSD103の埋土が確認できなかったためそう判断した。遺構埋土の南半を掘削した。土坑の規模は直径約2.8m、深さ0.7m以上で、掘方の平面は円形である。埋土からは土師器や須恵器の小片が出土している。

SD150 第1トレンチ東西調査区の東よりで検出した幅0.9m、深さ0.4mの東西方

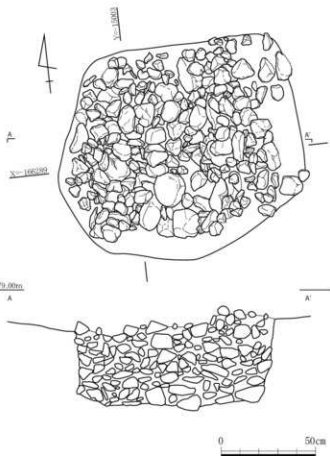


図10 SX140石検出状況及び横断面 (S=1/20)

向の溝である。埋土は黄橙色シルトに粗粒砂が混じるものであった。埋土からは須恵器や土師器、平瓦の小片が出土している。

SD162 第1トレンチ東西調査区の東より、SD150のすぐ北側で検出した幅0.9m、深さ0.2mの東西溝である。SD150と平行した溝であるが、SD162の埋土は、単位の大きい橙色ブロック土と褐色ブロック土によるもので、短期間に人為的に埋め戻されたようにみえる。埋土からは土師器の小片が少量出土したのみである。

SX140 第1トレンチ東西調査区で検出した90cm×125cmの隅丸方形に近い平面形の土坑である。深さは45cmになる。遺構の南半を掘削したところ、土坑内には礫が充填されているのがわかった。礫の大きさは直径5～20cm程度のもので様々あるが、下部の方が比較的大型の礫を使用しているように感じられる。隙間なく石が詰められており、石材の間のわずかな隙間には、滞水などの後の環境的な要因で堆積したと思われる柔らかい黄色粘土があるだけで、本来はこの土坑が礫のみで埋められていたと考えられる。埋土からは須恵器や土師器の小片が3点出土したのみであった。

SX146 長径1.75m、短径1.30mの楕円形をした土坑で、深さは30cm以上である。遺構の掘削はおこなっていないが、北端を部分的に断ち割りしている。それによると、土坑の内部には多数の礫が充填され、埋土の上部の方が直径5cm程度の小さな礫が目立ち、下部になると直径15cm程度の礫が含まれるようになる。隙間なく石が詰められており、SX140と同様に礫のみで埋められているものと考えられる。

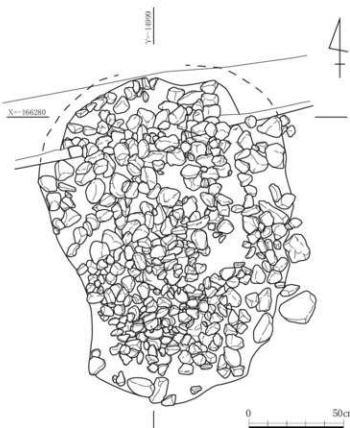


図11 SX146石検出状況 (S=1/20)

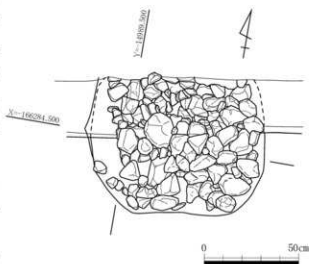


図12 SX153石検出状況 (S=1/20)

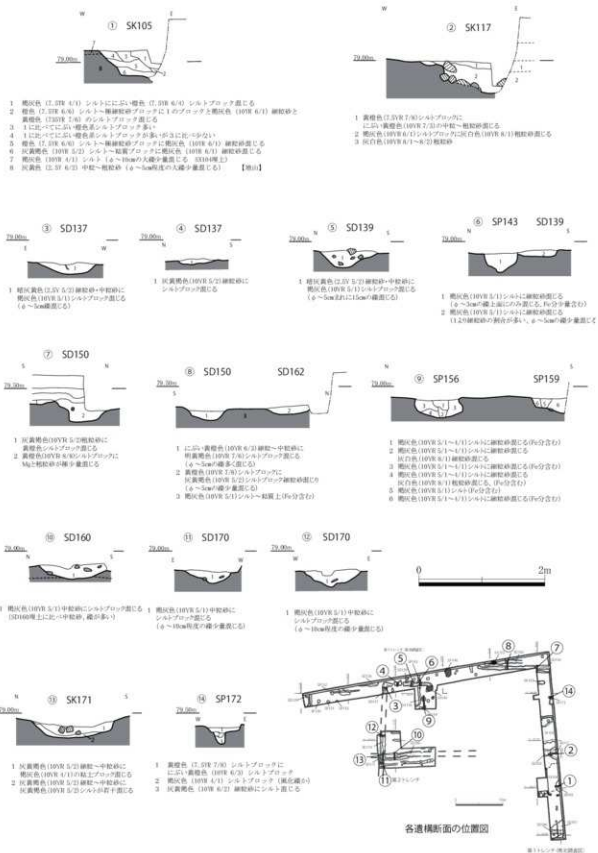


図13 遺構断面図 (S=1/60)

SX153 90cm×80cm以上の隅丸方形の掘方をした土坑で、深さは20cm以上ある。遺構の埋土の掘削はおこなっていないが内部には礫が充填されている。礫の大きさは径5～20cm程度のもので、隙間なく詰められ、SX146同様に石のみで土坑が埋められていると考えられる。

SD136・137・139・160・170 第1トレンチ東西調査区の中ほどで、クランクする溝（SD137）やL字状の溝（SD139）、東西溝（SD136）を検出した。異なる遺構番号を付しているが、一連の遺構の可能性が高いと考えられる。クランクする形で検出されたSD137は、幅1m、深さ10～20cmの溝である。上層の旧耕作に関連する素掘溝の影響を大きく受け、溝の東や北側の部分ほど検出面からの深さは浅くなる。SD136はSD137の東西方向の部分の西側延長部になる溝で、SD139は同じくSD137の東西方向の延長部分である。SD139の東部はSX140がSD139の埋没後掘削されており、東側がどのようになっているか判断しにくくなっているが、SX140の南側にSD139と同様の埋土が認められたためこの部分で長さ約1.3mほど南側に屈曲するようである。ただ、それ以上南に延びることは確認できず、SX140の東側にも延びることは確認できなかった。埋土からは、SD137が南に屈曲する付近から、暗文土師器が数個体まとまって出土し、SD139からは馬歯が出土している。

一方、南側に延伸することが確認できたSD137は、第2トレンチでも南北溝SD170として検出している。SD170は、南で東西溝SD160と十字に交差する。交差点の検出状況では二つの溝の切り合い関係はわからなかった。SD170は幅1m、深さ0.3mである。SD160は、幅1m深さは0.1～0.2mである。SD160は、後世の削平を受けたためか、調査区の東側では消失し、検出されなくなる。SD160がそのまま東にも延びていたとしたら、第1トレンチ南北調査区で検出したSD103と位置的にはつながる。約20m以上離れており、確定できないが一連の可能性もある。また、交差点SD160とSD170の埋土を除去後、SK171を検出しているが、SD170及びSD160と関連するものかは判断できなかった。出土遺物はそれぞれ小片ではあるが土師器や須恵器片が出土しているが、削平の影響もあって、SD160の方は量が少ない。

SK171 SD160とSD170の交差点の埋土を除去したところ、SK171を検出した。平面形は楕円形で長径1.5m、短径1.2m、深さ30cmであった。溝の検出や埋土掘削時にはこの土坑の存在に気がつかなかったため、前後関係は確定できないが、ちょうど交差する場所に位置しているので、溝に関連するもので併存していた可能性も考えられる。埋土からは須恵器や土師器の小片が出土している。

SD129 第1トレンチ東西調査区の西端で検出した南北溝である。上部を旧耕作土により大きく削平されたようで深さは20cmほどしかなく、幅も1.2～0.6mと一定ではない。埋土からは土師器や須恵器の小片が少量出土している。

柱穴遺構 柱穴と考えられるピット状遺構が、第1トレンチや第2トレンチで併せると30基以上検出している。その中でもSD129のすぐ東側にあるSP130・131・133は、それぞれの柱穴の芯々間は約1.9mで東西方向に規則的に並び、柱穴の規模も直径約50cmとほぼ同じことから同一の構造物（建物か）を構成する柱穴と考えられる。その他は調査区の幅が狭いこともあって、建物や柵を構成していると確定できる柱穴をみつけることができなかった。

3. 出土遺物

今回の調査では、コンテナケースにして約4箱の遺物が出土している。土器が大半を占め、他は瓦片、馬歯などがみられる。瓦片は3片しか出土しておらず、寺院跡近辺でおこなった発掘調査としては瓦の出土量は非常に少ないといえるだろう。

(1・2)はSD103から出土した土師器皿の口縁部で、小片のためそれぞれの口径は復元しづらいが、(1)は約23cm、(2)も20cmを超えるものと考えられる。口縁端部が外反する皿で口縁部内面には暗文がみられ、外面はミガキ調整である。

(3～7)はSK105から出土したものを図示している。(3)は、土師器坏で、表面が摩滅して調整が判別しにくい暗文などはみられない。口縁端部の内面には内傾する面がみられる。土師器坏身

(4)は、底部付近から体部にかけてケズリ調整を施し、口縁部のみヨコナデ調整をする。内面には放射状暗文がみられる。(5・6)は、外面調整が判別しにくい、(5)は底部にケズリ、口縁部付近はヨコナデ、(6)はナデ調整だと考えられる。(7)は土師器高坏の坏部の破片で、摩滅があるものの、放射状暗文、底部には螺旋状暗文の一部が確認できる。

(8・9)はSD106から出土している。(8)は須恵器坏蓋片、(9)は甕の口縁部の破片で、いずれも小片である。

(10～12)は、SK117から出土したものを図示している。(10)は土師器坏で内面には放射状暗文が、口縁端部内面には内傾する面がある。(11)は土師器皿で内面には放射状暗文、外面にはミガキ調整がみられる。口縁端部はナデにより外反する。小片のため復元口径の精度は低い。(12)は土師器甕で体部内外面はハケ調整だが、外面のハケは内面のものよりハケ目が細かい。

(13～15)はSD150から出土したものを図示している。(13・14)は高坏の破片と推定される。この二つは、推測される量など近似的にあり、色調などもほぼ同じであることから同一個体の可能性がある。(15)は厚さ1.7cm程度の平瓦で凸面に平行線の細かいタタキ痕が残る、青灰色で硬質の焼きをしている。側面端部と広端部の一部が残存している。凹面は基本的にはナデ調整し、布目痕がわずかに残存している。側面をヘラケズリし、広端部の凹面を面取りしている。奈文研報告の平瓦2類B、桜井市報告平瓦C類に相当する²⁾。

(16～24)はSD137から出土したもののうち、北西角からまともに出て出土した土師器の坏身や壺を図示している。出土状態から一括性が高く、個々の残存状態もよい。(16)はほぼ完形の小型の坏身で、内面口縁部はヨコナデで暗文がみられず、外面は摩滅して不鮮明である。底部外面中央付近がユビオサエにより少し凹んでいるのが特徴的である。(17)は坏身で、内外面とも摩滅で調整が不鮮明である。(18)は、内面には放射状暗文、底面には螺旋状暗文がみられる。外面は摩滅により調整は不鮮明である。底部外面中央付近がユビオサエにより少し凹んでいるのが特徴的である。(19)は内面には放射状暗文、底面には同心円文、外面は口縁部がヨコナデ、底部はナデ調整、底部外面中央付近がユビオサエにより少し凹んでいる。土師器坏(20)は、内面口縁部に2段の放射状暗文があり、底面には細かな同心円文状の暗文がある。外面口縁部にはミガキ調整、底部付近はケズリ調整である。土師器

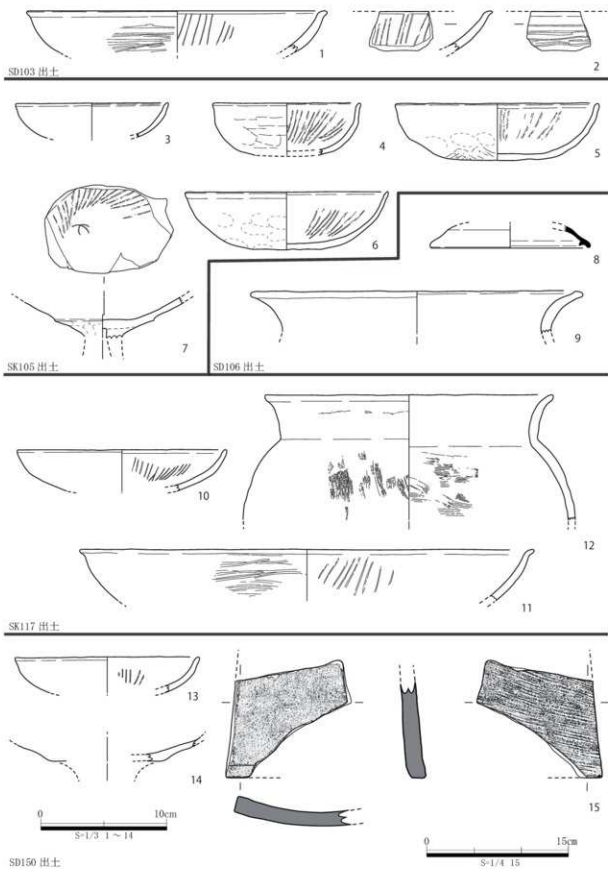


図14 出土遺物① (S=1/3、15のみS=1/4)

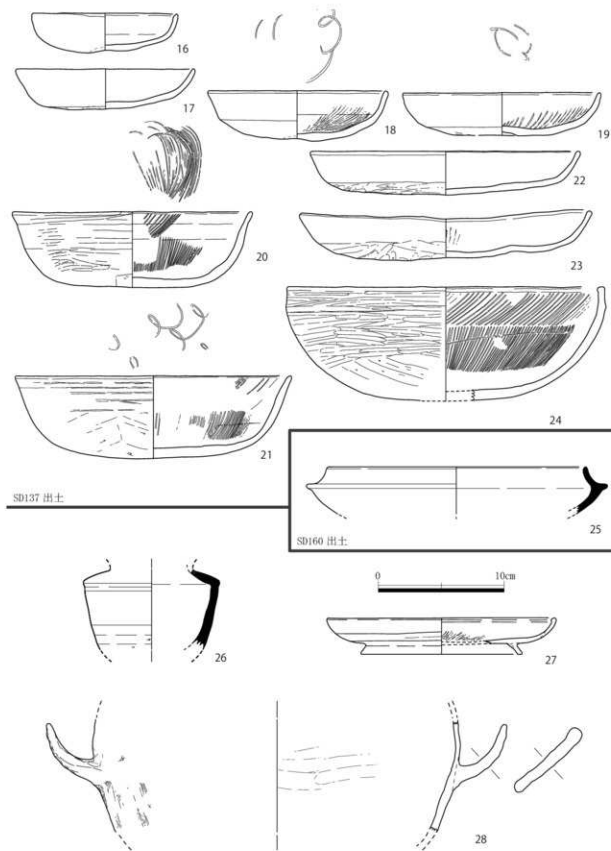
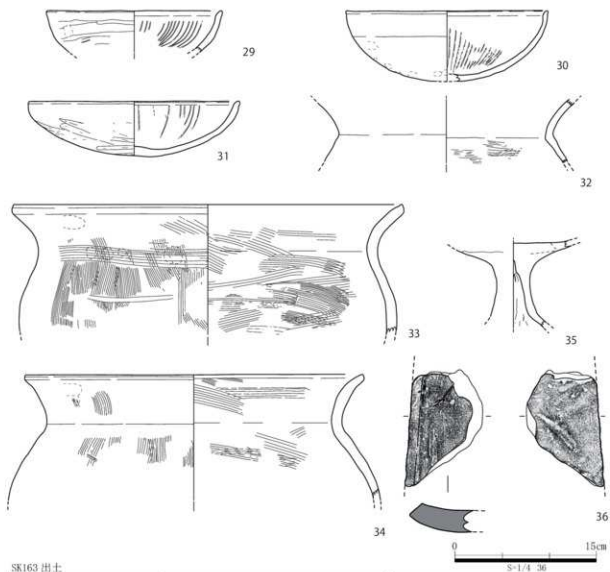
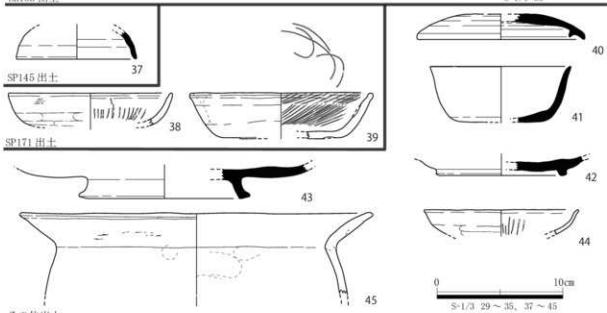


图15 出土遺物② (S=1/3)



SK163 出土



その他出土

図16 出土遺物③ (S=1/3, 36のみS=1/4)

坏(21)は内面には2段の放射状暗文が確認でき、底部は螺旋状暗文が確認できる。外面は口縁部付近がヨコナデ後ミガキ調整、底部付近がケズリ調整である。(22・23)は直径20cmを超える大型の皿である。(22)は、内面は摩滅のため調整が不鮮明であるが、(23)は放射状暗文が確認できる。外面底部付近はケズリ調整、口縁部はヨコナデである。(24)は直径25cmの碗で、全体の約半分が残存している。内面は2段の放射状暗文で、底部は摩滅のため不鮮明である。外面は体部から口縁部にかけてはミガキ調整、底部はケズリ調整である。

(25)はSD160から出土した須恵器坏身である。他の出土遺物より古相を示すものだが、小片のため遺構の埋没時期を表すものではないと考えられる。

(26~28)はSD170から出土したものを図示している。(26)は須恵器壺類の肩部から体部上半にかけての破片である。(27)は脚付きの土師器皿で内面口縁部には放射状暗文、口縁端部は内面に折り曲げて丸く取める。(28)は土師器把手付甕と考えられるもので、把手及びその付近の胴部片である。胴部外面はハケ、内面はナデ調整である。

(29~36)はSK163から出土したものを図示している。遺構埋土の掘削量の割に出土量は多い。(29~31)は土師器坏身である。(29)の外面は体部はケズリ、口縁部はヨコナデ、内面は放射線状暗文で

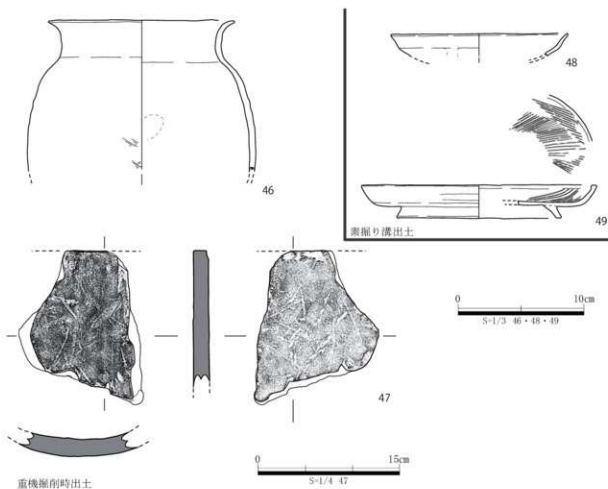


図17 出土遺物④(S=1/3, 47のみS=1/4)

ある。(30)の口縁部は軽く外反し内面に面をもつ。体部から底面はナデやユビオサエで調整されている。内面は放射状暗文で底面は摩滅で不鮮明である。(31)は摩滅のため調整は不鮮明であるが、内面には放射状暗文、外面の体部から底部にかけてはケズリ調整が確認できる。(32～34)は土師器甕もしくは鍋の口縁部から体部上半の破片である。(36)は厚さ約2.3cmの平瓦で側面端部が一部残存している。凹面は布目痕がそのまま残っている。凸面は摩耗しているもののタタキ痕はナデにより残存していないようにみえる。奈文研報告の平瓦1類、桜井市報告の平瓦B1類に相当する。

(37)はSP145から出土しているもので、小型の須恵器蓋である。

(38・39)はSK171から出土した土師器坏身である。(38)は内面に放射状暗文、(39)の内面口縁部は2段の放射状暗文で底面には螺旋状暗文がある。外面は摩滅で不鮮明だが口縁部はヨコナデである。

(40～45)は、SX104とした浅い落ち込みに堆積している黒色シルト層から出土したものを図示している。(40～43)は須恵器坏類で、(44)は放射状暗文が内面にある土師器坏身、(45)は体部をハケ調整する土師器の甕である。

(46・47)は、重機掘削で現代耕作土などを除去しているときに出土したもので、詳細な出土層位が不明確なものである。(46)は土師器甕で、内外面とも摩滅し調整は不明確である。(47)厚さ約1.8cmの平瓦片で、狭端もしくは広端の一部が残存している。凹面は、ナデ調整しているが布目痕は完全には消されていない。凸面は丁寧なナデ調整で、タタキ痕は残っていない。奈文研報告平瓦2類A、桜井市報告平瓦B2類に相当する。

(48・49)は中世の素掘溝から出土しているもので、(49)は台付きの土師器皿で口縁部内面には二段の放射状暗文がみられる。

今回出土した土器は、一部古い時期のものが含まれるものの、全体的にはそれぞれ時期差がみられず、飛鳥Ⅳ～Ⅴ、7世紀後半～8世紀初頭にかけてのものだと考えられる。吉備池廃寺の廃絶前後から藤原京期までに該当するものだとはいえる。

4. まとめ

今回検出した遺構は、出土遺物から7世紀後半～8世紀初頭の時期までに廃絶した遺構だと考えられる。これは、古くみれば、吉備池廃寺の廃絶前後のもので、新しく見れば藤原京期までに該当する。今回の遺構がそのどちらに関連するものかに検討を加え、まとめとする。

まず、今回調査の大きな目的であった吉備池廃寺の寺域を定めるような遺構の有無の観点で、検出した遺構を評価していきたい。寺域を区画する施設として最も考えられるのは、正方位を軸にもつ、塀、欄、門などである。具体的な遺構としては、列状にならぶ柱穴や、塀、欄などに伴う溝が考えられる。今回の調査区では、多くの柱穴を検出しているが、せいぜい2～3基並ぶ程度で、南北や東西方向に長い距離で並ぶものはなかったため、寺域を画する遺構ではなかったと考えている。一方、正方位に近い軸をとる溝は多い。南北溝では、SD129、SD137、SD170、東西溝ではSD103、SD106、SD136 (SD137・139)、SD150、SD162などがあげられる。これらの溝も、区画する欄や塀などの構造物を伴

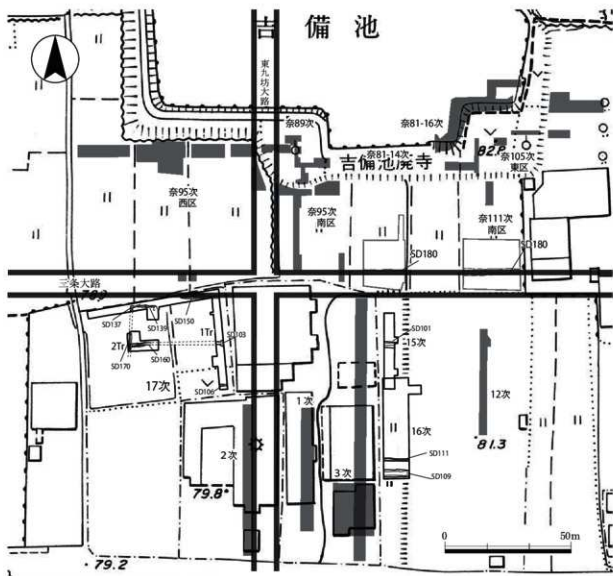


図18 調査区と藤原京条坊道路(S=1/1,500)

う可能性が低く寺域を画する遺構として評価できるものではなく、今回の調査では寺域を確定することはできなかったといえる。

次に、吉備池苑寺もしくは藤原京に関連する遺構の視点で、少し検討を加えたい。SD150もしくはSD162は、結論からいうと三条大路の南側溝の可能性が高い。三条大路の北側溝は、すぐ北側でおこなわれた奈良文化財研究所の調査の95次南区で、SD180として確認されている³⁾ (以下、奈文研95次-SD180)。奈文研95次-SD180の溝心の南北の座標位置は $X=-166.274\text{m}$ ($Y=-14.948\text{m}$)で、今回の調査のSD150は $X=-166.284.5\text{m}$ ($Y=-15.075\text{m}$ 付近)、SD162は $X=-166.283\text{m}$ ($Y=-15.075\text{m}$ 付近)となる。そうなるもSD150が三条大路南側溝の場合、南北の両側溝の溝心間の幅員は10.5m、SD162の場合は、9mとなる。三条大路の溝心々間の幅員は、これまでの成果から9m前後のため、SD162の方が三条大路の南側溝に相応しい。ただ、前述したようにSD162は単位の大きなブロック土で埋没しており、人為的に一度に埋め戻されたように見え、溝として機能していたと思われる埋土があまり認

められない。一方、SD150はどちらかといえば溝らしい堆積で、溝としてある程度の期間、機能していたと考えられる。なんらかの理由でこの区間において、道路が拡幅もしくは縮小された可能性も考え、SD162とともにSD150も三条大路の南側溝の候補として挙げておきたい。

次にSD136・137・139・160・170などが、一連の遺構となるとすれば一体どのような遺構が考えられるだろうか。寺に伴うものであれば、寺地内を画する溝、藤原京期であれば宅地内を区画する溝になる。区画内を全面的に調査したわけでないので、それ以上の検討は、今後の調査の進展に期待するしかないが、寺の回廊のすぐ南西側に寺域内を区画するような遺構が存在しているとはなかなか考えにくい。また、出土物をもても瓦片が全くなく、寺院廃絶直後に埋没した遺構としては違和感がある。藤原京期の宅内を区画する溝と考えた方が理に適っていると考えられる。

以上のように、本調査では、吉備池廃寺に関連するものより、藤原京に関連するもしくはその可能性が高い成果が多いという結果となった。吉備池廃寺廃絶後の藤原京期では、過去の調査も含めて遺構が多く、建物や施設が多く立ち並ぶ区画であったと考えられる。天皇の勅願寺であった場所を藤原京期にはどのように活用していたのか興味深い成果であった。

一方、当初の目的であった吉備池廃寺の寺域を画する遺構が検出できなかったのは、7世紀後半の遺構面がそれなりに残存していた結果から、今回の調査範囲には存在していなかった可能性が考えられる。今回の調査区は中心伽藍との位置関係から、7世紀後半までは吉備池廃寺の寺域内であった可能性が高く、寺域を区画する大垣が当時存在していたのであれば、今回の調査区の外側に想定する必要があるし、また、短期間の造営期間のため大垣が整備されなかった可能性も残る。今後は大垣の想定範囲を広げて検討しなければならないであろう。

(丹羽)

【註記】

- 1) 奈良文化財研究所2003「吉備池廃寺発掘調査報告—百済大寺跡の調査—」奈良文化財研究所創立50周年記念学報第68冊
 - 2) 平瓦の分類の奈文研報告及び板井市報告は、それぞれ以下の文献をさす。
花谷浩2002「第四章 遺物 1瓦磚 C丸瓦 D平瓦」『吉備池廃寺発掘調査報告—百済大寺跡の調査—』奈良文化財研究所創立50周年記念学報第68冊 独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所
- 丹羽恵二2016「吉備池遺跡第16次調査」『板井市内遺跡発掘調査報告書—2013年度—』公益財団法人 板井市文化財協会
- 3) 註記1)に同じ

第3節 纏向遺跡第189次発掘調査報告

1. はじめに

纏向遺跡第189次調査は、大字巻野内390における個人住宅の建設に先立つ発掘調査である。調査地は纏向遺跡のほぼ中央に位置しており、周辺の調査では、調査地から北に約100mの場所でおこなわれた第71次調査で、古墳時代前期の方形周溝墓や6世紀ごろの掘立柱建物が検出されている。南東に30mの場所でおこなわれた第14次調査では、明確な遺構は確認されていないが旧河道と考えられる礫層から須恵器の把手付椀、甕、横瓶などが出土している。今回の調査でも、これらの調査と同様の古墳時代の遺構・遺物や旧河道を検出することが期待された。

調査期間は平成29年1月10日から2月6日までで、調査面積は100㎡である。

2. 調査の成果

調査地の南寄りに一辺10mの正方形のトレンチを設定した。現代耕作土、旧耕作土をバックホーで掘削し、以降を人力に切り替え掘削をおこなった。調査の結果、落ち込みとピットや溝などを検出し

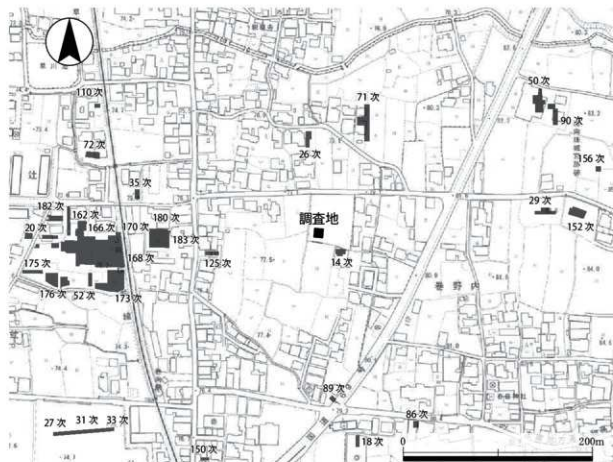
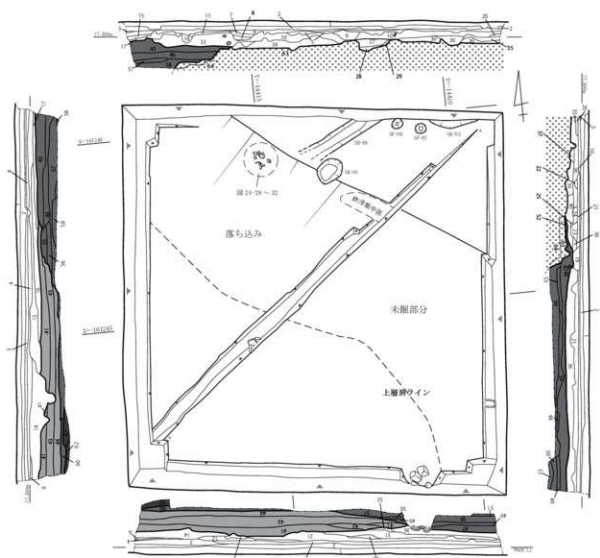


図19 纏向遺跡第189次調査地位置図 (S=1/4,000)



- | | | | |
|-----------------------------------|---------|------------------------------------|---------|
| 1. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂質シルト質層 | 【現代地層上】 | 26. 2.5V 4/2 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【中世古墳層】 |
| 2. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) | 【現代地層上】 | 27. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 | 【19世紀】 |
| 3. 2.5V 4/2 フォーフ層 粘砂 (2.5mm) | | 28. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂-粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 4. 2.5V 4/2 黒褐色 粘砂-粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【現代地層上】 | 29. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) | 【18世紀】 |
| 5. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂-粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | | 30. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 6. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 | 【現代地層上】 | 31. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【18世紀】 |
| 7. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | | 32. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 8. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【現代地層上】 | 33. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【18世紀】 |
| 9. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | | 34. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 10. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【現代地層上】 | 35. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【18世紀】 |
| 11. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | | 36. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 12. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【現代地層上】 | 37. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【18世紀】 |
| 13. 2.5V 4/2 フォーフ層 粘砂 (2.5mm) | | 38. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 14. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【現代地層上】 | 39. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【18世紀】 |
| 15. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | | 40. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 16. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【現代地層上】 | 41. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【18世紀】 |
| 17. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | | 42. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 18. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【現代地層上】 | 43. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【18世紀】 |
| 19. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | | 44. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 20. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【現代地層上】 | 45. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【18世紀】 |
| 21. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | | 46. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 22. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【現代地層上】 | 47. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【18世紀】 |
| 23. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | | 48. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 24. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【現代地層上】 | 49. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【18世紀】 |
| 25. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | | 50. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 26. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【現代地層上】 | 51. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【18世紀】 |
| 27. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | | 52. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 28. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【現代地層上】 | 53. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【18世紀】 |
| 29. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | | 54. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 30. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【現代地層上】 | 55. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【18世紀】 |
| 31. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | | 56. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 32. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【現代地層上】 | 57. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【18世紀】 |
| 33. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | | 58. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |
| 34. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【現代地層上】 | 59. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | 【18世紀】 |
| 35. 2.5V 4/2 灰褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | | 60. 2.5V 4/1 黒褐色 粘砂 (2.5mm) 粘砂層 | |

図20 調査区平面・断面図 (S=1/100)

た。基本層序は上から現代耕作土（図20-1・2層）、旧耕作土（3～6層）、中世包含層（34～37層）、地山層（63・64層）である。

落ち込み 調査区の半分以上の面積を占める大きな落ち込みである。この落ち込みの埋土は上・中・下層に分けることができ、上層（図21-1～3層）は11世紀後葉頃、中層（図21-4～15層）は10世紀頃、下層（図20-60・61層）は5世紀以前に堆積したと考えられる。下層を確認した範囲は限られていたが、中層とは違い出土遺物に須恵器が混じらないことから、中・下層に分けて考えている。中・下層の堆積状況から、この落ち込みは流水していたと考えられ、このことから旧河道の可能性が考えられる。上層は粘質土や腐植土などが堆積しており、流水しておらず滞水していたと考えられる。

出土遺物は、上層からは10世紀から11世紀後葉頃の土器が出土している。主な遺物は、土師器の甕（図22-6）が土丘で潰れた状態で出土しており、その破片に混じって勾玉が1点出土している（8）。その他に、瓦器や黒色土器、灰軸陶器などが出土している。中層からは、6世紀から10世紀頃の遺物が出土している。緑軸陶器や奈良三彩などの陶器が出土しており、その他に黒褐色シルト質細砂層（図21-4層）から須恵器の高坏4点と須恵器の壺の蓋1点がまとめて出土している（図24-28～32）。この高坏などは、落ち込みの肩付近でまとめて出土しており、一括性が認められる。しかし、これらが出土した層位からは、奈良三彩などの高坏よりも新しい時期の土器が出土しており、高坏の時期よりも後の時代にこの落ち込みに一括廃棄された可能性が考えられるが、断定はできない。その他に、暗オリーブ褐色粘質土層（1層）からにぶい黄橙色細礫～中礫層（14層）にかけて鉄滓が多く出土している。その中でも、中層（4～14層）からの出土量が多く、これらの鉄滓は中層に帰属するものと考えられる。出土した鉄滓の一部は、中層の上方からまとめて出土しているなど（図20 鉄滓集中部）、中層の中でも比較的新しい時期のものである可能性が高い。畿治関連遺物は他に輪羽口片が出土しており、1点のみ鉄製品が出土している。鉄製品は高師小僧¹⁾のような砂や礫でできた塊の中に

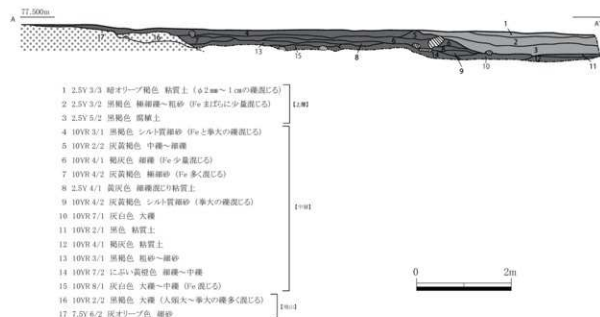


図21 落ち込み断面図 (S=1/100)

入った状態で見つかった。鉄製品自体の鉄分によってこのような事象が起こったのではないかと考えられる。

3. 出土遺物

今回出土した遺物は、コンテナケースに換算して15箱分であった。図化できた遺物は、すべてが落ち込みからの出土である。以下、層位ごとに記述する。また、輪羽口や鉄滓などについては、上・中層から出土しているが、他の遺物とは分けて鍛冶関連遺物としてまとめて記述する。細かな法量などについては表3・4に記載している。

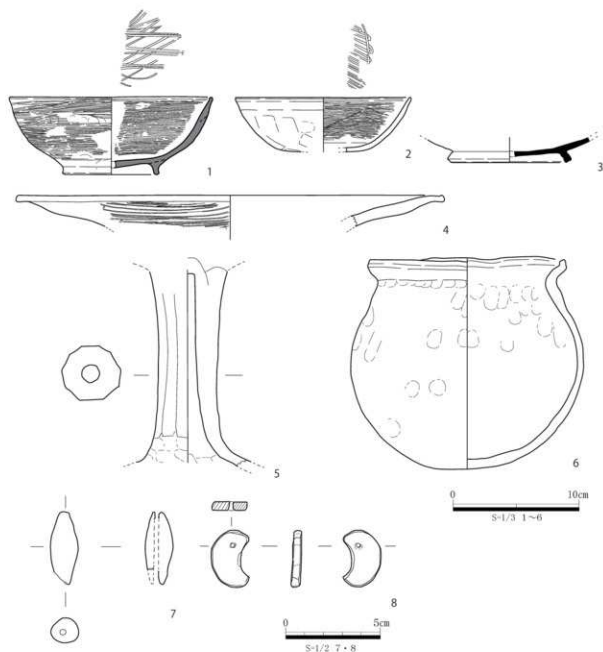


図22 落ち込み上層出土遺物 (S=1/3、7と8のみS=1/2)

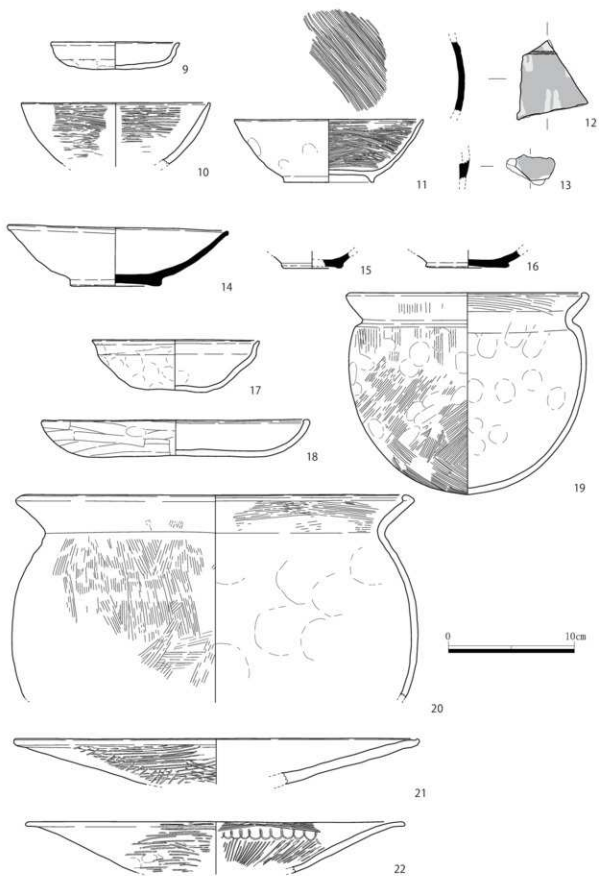


図23 落ち込み中層出土遺物① (S-1/3)

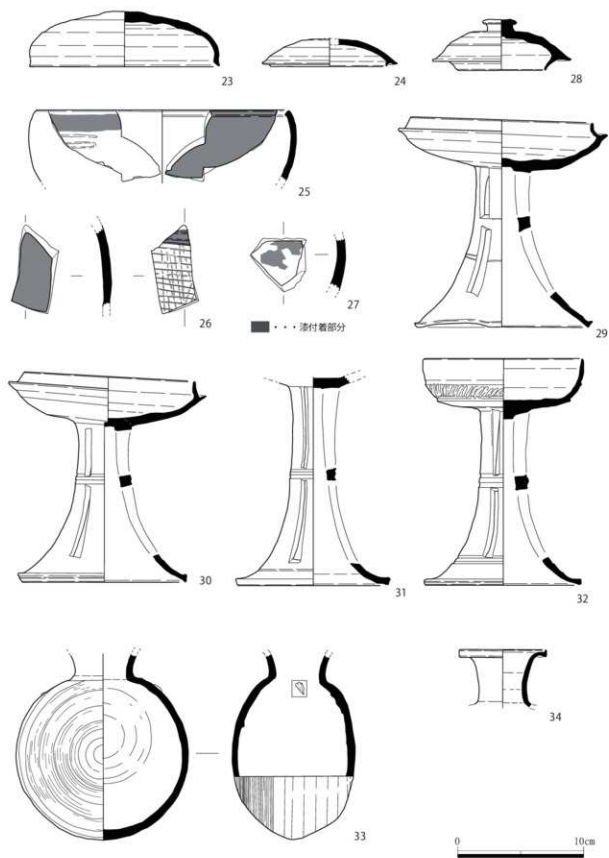


図24 落ち込み中層出土遺物② (S=1/3)

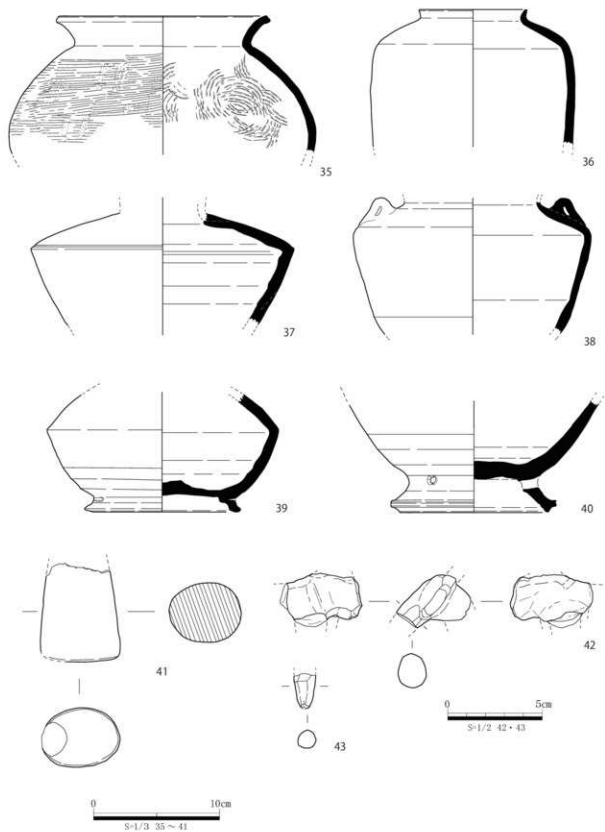


図25 落ち込み中層出土遺物③ (S=1/3)

上層出土遺物 (図22) 落ち込みの上層から出土した遺物は(1～8)である。(1)は瓦器塚である。口径16cm、器高6.1cm、見込の深さ5cmで、見込部分には格子状暗文が施されている。内外面ともに密にヘラミガキが施されており、口縁端部には沈線が施されている。瓦器塚の時期は、奈良Ⅱ-B(11世紀後葉)頃であろう。(2)は黒色土器である。口径13.8cm、器高4.3cmで、平底の無高台杯の形態を有する。外面にはヘラケズリ、内面には密にヘラミガキを施した、内黒仕上げである。(3)は灰軸陶器である。底径9cmで、断面方形の付高台である。内面の見込み部分には施軸されていない。(5)は高杯の脚部である。脚柱部の長さは15cm以上と長脚で、外面はヘラケズリによる面取りのため断面形は多角形を呈する。(7)は土錘である。長さ3.8cm、最大幅1.5cmで一部欠損した状態で出土した。(8)は滑石製²⁾の勾玉である。最大長3.0cm、最大幅1.7cm、厚さ0.5cmの扁平な形態である。(6)の葉の破片に混じって出土した。

中層出土遺物 (図23～25) 落ち込み中層から出土した遺物は(9～43)である。(10・11)は黒色土器である。(10)は両黒の黒色土器塚で口径15cm、残存器高4.9cmである。内外面に密にヘラミガキが施されている。(11)は内黒の黒色土器塚で、口径15cm、器高5cmである。内面には密にヘラミガキが施されている。(12・13)は奈良三彩の小片である。(12)は奈良三彩の壺の胴部と考えられる小片で、上部に沈線が確認できる。(14・15)は軟陶の緑軸陶器である。(14)は口径17.3cm、高台径7cm、器高4.9cmで、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は丸く仕上げら



図26 落ち込み下層出土遺物 (S=1/3)

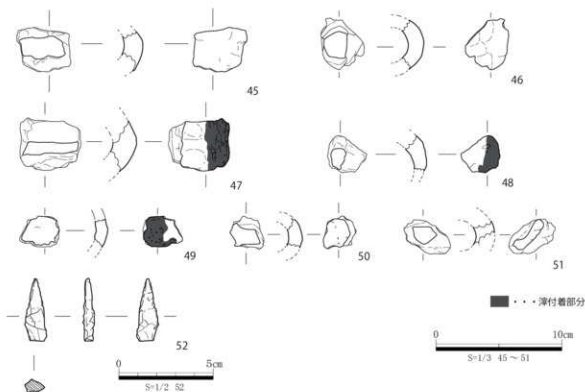


図27 鍛冶関連出土遺物 (S=1/3、53のみS=1/2)

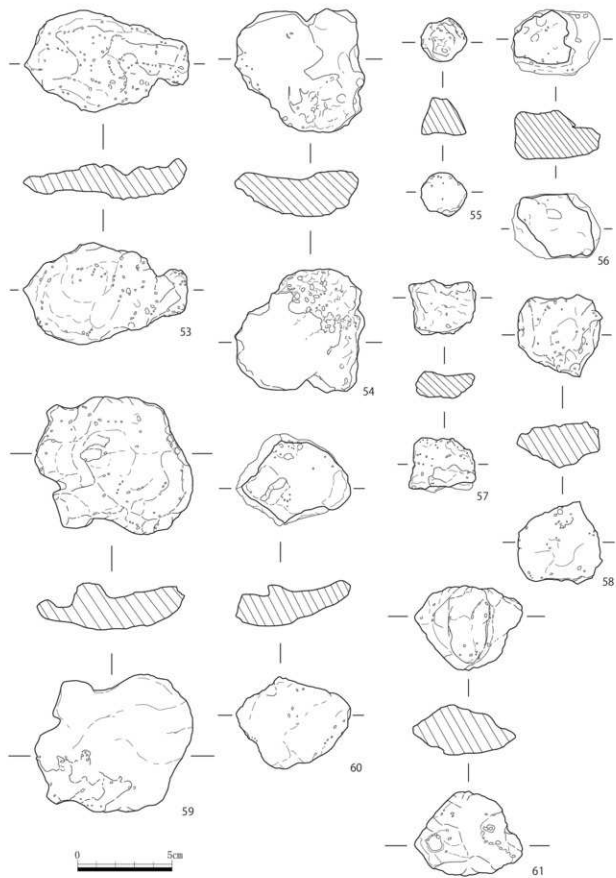


图28 出土铁滓① (S=1/2)

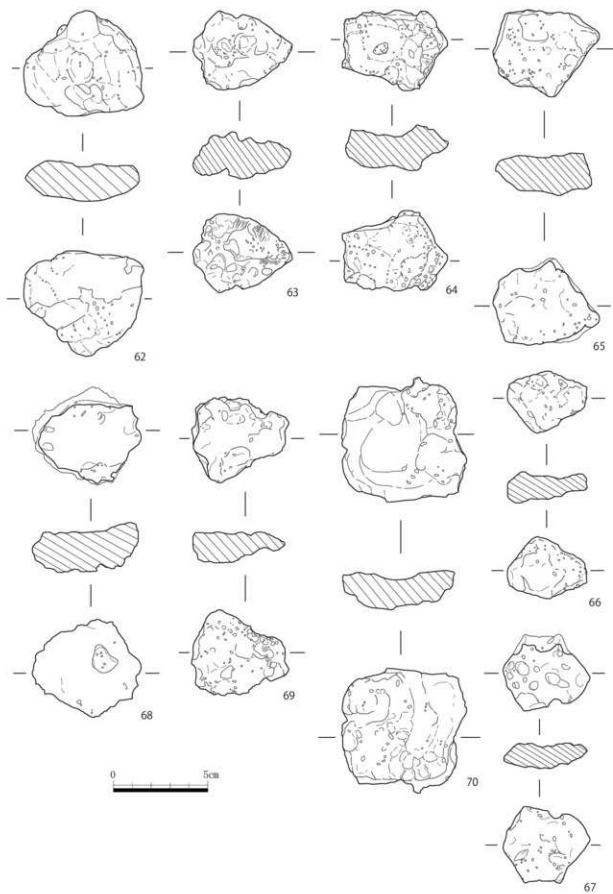


图29 出土铁滓② (S=1/2)

れているが少し外反している。軸調は(14・15)とも淡緑色を呈している。(16)は硬陶の緑軸陶器である。高台径は6.4cmであり、軸調は深緑色を呈する。(22)は土師器の盤である。口径30cmで、内面には連弧状磨きと外螺旋状磨き、放射状暗文が施されている。(25～27)は漆が塗られている須恵器である。(25)は鉄鉢形の須恵器鉢で外面上部と内面全体に漆が付着している。(26)も鉄鉢形の須恵器と考えられ、外面にミガキが確認できる。内面全体と外面の一部に漆が付着しており、接点は確認できなかったものの、(25)とは同一個体であろう。(28～32)は落ち込みの肩部付近から出土した須恵器である。(29・30)は有蓋高坏である。いずれも二段三方向に長方形透かしがある脚部を持つ。(32)は無蓋高坏である。坏部の口縁部が直立気味に伸び、口縁部中位と底部との境に稜があり刻み目が施されている。脚は長く裾が広がるもので、二段三方向に長方形透かしがある。(39)は須恵器の壺である。底径12.4cm、胴部径18.2cmで高台部分には3方に透孔をあけるためであろう工具痕が残っている。(42・43)は土馬である。(42)は頭部から前足にかけて残存しており、頭部を右側に傾けた形態をしている。(41)は円錐状で上部が欠損している石製品である。残存高7.1cmで、底面は楕円形を呈しており、長径6.8cm、短径4.8cmである。円錐状であり、底面が摺り面のような形態をしていることから石柱と考えられる。しかし、摺り面の磨減が少なく、付着物が確認できなかったため断定はできない。材質は珎岩である²⁾。

下層出土遺物(図26) 下層は出土遺物が少なく因化できたものは小型丸底壺(44)1点のみであった。内外面ともに密なヘラミガキが確認でき、外面は横方向のミガキ、内面は横方向のミガキのち縦方向のミガキが施されている。

鍛冶関連遺物(図27～29) 鍛冶関連遺物は(45～52)が輪羽口と鉄製品で、(53～70)が鉄滓である。出土鉄滓はコンテナケース2箱分で、総重量は約17.5kgであった。輪羽口はいずれも小片である。(52)は不明鉄製品である。砂の塊の中に入っていたためか錆跡はなく、表面は酸化して黒くなっている。鐵のような鉄製品であると考えられるが、断定はできない。

4. まとめ

今回の調査地には、古墳時代前期には流水を伴う落ち込みが存在していたことがわかった。検出した落ち込みは、埋土の堆積状況の違いなどから埋没過程を大きく二段階に分けることができる。第一段階は、中層から下層で礫が多く混じっている層である。安全面などの関係で最下層まで掘削することはできなかったが、少なくとも古墳時代前期から平安時代中期ごろの遺物を含む、流水を伴う堆積であったことがわかった。第二段階にあたる上層は、粘質土や腐植土が堆積していた。このことから、平安時代中期以降には、この落ち込みは水の流れがほとんどない状態で堆積していったと考えられる。上層は、中層が堆積したのちに中層を削ったような落ち込みに堆積しており、上層の落ち込みが自然にできたものなのか、人為的に掘削されたものなのかを明らかにすることはできなかった。今回の調査地は、安井隆浩氏によって復元されている瀬向川河道1(辻河道)上に位置しており³⁾、検出した落ち込みは瀬向川の旧河道の北岸である可能性が高い(図30)。

この北岸の微高地では、今回の調査地から西に250mのところでおこなわれた第72次調査で「宮内」と書かれた墨書土器や漆が付着している須恵器鉢などが見つかり、周辺には奈良時代に階層の高い人々が存在していた可能性が指摘されている⁴⁾。今回の調査地は第72次調査地と土つ道を挟んで比較的近いうえに、緑軸陶器や奈良三彩片の他に漆が塗られている須恵器などが出土していることから、第72次調査地周辺と同じく、階層の高い人々が暮らしていた地域である可能性が考えられる。また、鉄滓が多く出土し輪羽口も出土している。これらの鉄滓は、落ち込みの上層から中層にかけて出土しているが、出土状況から中層に帰属するものと考えられる。詳しい時期については断定することはできないが、中層の上方でまとまって出土していることから、平安時代前半ごろに鉄の生産が周辺でおこなわれていた可能性が推測できる。今後、周辺の調査が進むことによって明らかになることを期待したい。

(三沢)

【註記】

- 1) 土中の水分の中に含まれる鉄分が植物の根などの周りに集まり、根が腐った後に褐鉄澱などを主体として固まった塊
- 2) 石の材質については奥田高氏に鑑定いただいた。
- 3) 安井隆浩2006『奈良県縦向遺跡の立地基盤と古地形環境』『東田大塚古墳』(財)桜井市文化財協会
- 4) 森 暢郎2015『縦向遺跡発掘調査報告書3-第35次・63次・72次-』桜井市教育委員会

【参考文献】

- 森下恵介・立石堅志1987『大和北部における中近世土器の様相』『奈良市埋蔵文化財センター紀要1986』奈良市埋蔵文化財センター
- 松本洋明1988『十六面・薬王寺遺跡の中・近世土器に関する考察』『十六面・薬王寺遺跡』奈良県立橿原考古学研究所中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 中島和彦・佐藤聖聖2014『南都出土中近世土器資料-奈良町遺高天町遺跡(HJ第559次調査)出土資料-』奈良市教育委員会
- 高橋照彦2003『平安京近郊の緑軸陶器生産』『古代の土器研究 平安時代の緑軸陶器-生産地の様相を中心に-』古代土器研究会第7回シンポジウム 古代の土器研究会



図30 縦向遺跡周辺の古地形復元図 (S=1/20,000)

※安井 2006 を参考に作成

表3 縄向遺跡第189次調査 出土土物観察表①

調査番号	種別	遺構	地区・遺跡	層位	注目 物	法量 (cm)		検体	色調	備考	
						口径	高さ				
1822-1	瓦器	瓦	落ち山A (土層)	褐色リソープ灰 色粘土	内面: 1.5mm, ナガ, 筒オヤス 内面: 1.5mm, 短文, ナガ	18	61	1層壁1.3	内面: N 5 - 6 灰色の中間色 内面: N 5 - 6 灰色の中間色		
1822-2	褐色土器	杯	落ち山A (土層)	褐色リソープ灰 色粘土	内面: 3.0mm, ナガ 内面: 3.0mm, ナガ, 短文	158	63	1層壁1.7	内面: 2.5X3.7 灰白色 内面: 10YR 7/2 灰白色		
1822-3	灰褐色磁器	蓋?	北溝溝 (土層)	褐色砂状粘土	内面: 同軸ヘラタズリ, 同軸ナガ 内面: 同軸ナガ	9	118	底壁1.2	内面: 2.5Y 7.5 灰白色 内面: 2.5Y 7.1 灰白色	見本品には灰褐色なし	
1822-4	1層壁	高坪	落ち山A (土層)	褐色リソープ灰 色粘土	内面: ナメのり1.5mm, ナガ 内面: ナガ	104	123	内壁1.11	内面: 2.5Y 7.7 灰褐色 内面: 2.5Y 7.4 浅褐色		
1822-5	1層壁	高坪	落ち山A (土層)	褐色色磁器	内面: ヘラタズリ, ナガ, 筒オヤス 内面: ナガ		111	側壁1.34	内面: 2.5Y 6.2 暗灰褐色 内面: 2.5Y 6.1 暗褐色	高坪? (1層壁)	
1822-6	1層壁	壺	(土層) 落ち山A 北石付石	内面: ナガ, 筒オヤス 内面: ナガ, 筒オヤス, 工灰付	154	168	1層壁1.2 側壁1.2	内面: 2.5Y 6.4 1.5mm-程度 内面: 2.5Y 7.4 1.5mm-程度		内面に黒付着	
1822-7	1層壁	土師	北溝溝 (土層)	内面: ナガ		長さ 18	最大幅 13	全体の90%	内面: 2.5Y 6.5 1.5mm-程度, 2.5 黄色 内面: 2.5Y 6.5 1.5mm-程度		
1822-8	石製土	勾玉	落ち山A (土層) 北石付石			最大長 20	最大幅 17	5%	注1) 不明	N 4 - 灰褐色 2.5mm 中凸	
1822-9	1層壁	壺	北溝溝 (土層)	内面: ココナテ, ナガ 内面: ココナテ		16	215	全体の2.3	内面: 2.5Y 6.5 1.5mm-程度 内面: 10YR 6.2 1.5mm-程度		
1822-10	褐色土器	瓦	東西溝付石 (土層)	内面: 1.5mm, ナガ 内面: 1.5mm		15	160	1層壁1.4	内面: N 2 黄色 内面: N 2 黄色		
1822-11	褐色土器	瓦	北溝溝 (土層)	内面: ナガ, 筒オヤス 内面: 1.5mm, ナガ		13	3	全体の1.2層	内面: 2.5Y 6.2 1.5mm-程度, N2 暗褐色 内面: N 2 黄色		
1822-12	奈良土器	壺	北溝溝 (土層)	内面: 浅黄 内面: ナガ	最大長 57	最大幅 53	5%		内面: 2.5Y 6.3 オリーブ黄色, 2.5Y 6.4 灰褐色 内面: 10YR 6.2 浅褐色		
1822-13	奈良土器	壺	落ち山A (土層)	褐色色シト	内面: ココナテ	最大長 22	最大幅 29	5%		内面: 2.5Y 6.5 オリーブ黄色 内面: 2.5Y 6.2 灰白色	
1822-14	緑釉磁器	瓦	落ち山A (土層)	褐色色磁器	内面: ナガ 内面: ナガ	173	7	4 - 6 1層壁1.4	内面: 2.5Y 6.4 浅褐色, N2 2.5Y 6.3 オリーブ黄色	底面緑	
1822-15	緑釉磁器	瓦	北溝溝 (土層)	褐色色磁器	内面: ナガ 内面: 同軸ナガ	68	133	底壁1.5	内面: 2.5Y 6.3 オリーブ黄色 内面: 2.5Y 6.2 オリーブ黄色	底面緑	
1822-16	緑釉磁器	瓦	北溝溝 (土層)	褐色色磁器	内面: 同軸ナガ 内面: 同軸ナガ	64	110	底壁1.6	内面: 2.5Y 6.1 暗オリーブ黄色 内面: 2.5Y 6.1 暗オリーブ黄色	底面緑	
1822-17	1層壁	瓦	落ち山A (土層)	褐色色シト	内面: ココナテ, ナガ, 筒オヤス 内面: ココナテ, ナガ, 筒オヤス	13	62	注1) 不明	内面: 2.5Y 6.5 暗褐色, 7.4 1.5mm-程度 内面: 2.5Y 6.5 暗褐色		
1822-18	1層壁	壺	北溝溝 (土層)	褐色色磁器	内面: ナメのり, 筒オヤス 内面: ナガ	20	205	1層壁1.3	内面: 2.5Y 7.6 灰白色 内面: 2.5Y 6.3 浅褐色		
1822-19	1層壁	壺	落ち山A (土層)	褐色色シト	内面: ナメのり, ナメのり, ナガ 内面: ナメのり, ナメのり, ナガ	166	16	全体の1.2	内面: 2.5Y 6.2 1.5mm, 6.3 浅褐色 内面: 2.5Y 6.2 1.5mm, 6.3 浅褐色		
1822-20	1層壁	壺	落ち山A (土層)	褐色色シト	内面: ハシ, ハシのり, ココナテ, ナガ 内面: ハシ, ナガ, 工灰付	304	192	1層-側壁中 1層壁1.6	内面: 10YR 6.3 浅褐色, N 2 黄色 内面: 10YR 6.3 浅褐色	底面に黒付着	
1822-21	1層壁	高坪	北溝溝 (土層)	褐色色シト	内面: ナメのり1.5mm 内面: ナガ, 短文	10	150	1層壁1.4	内面: 2.5Y 6.5 暗褐色 内面: 2.5Y 7.4 1.5mm-程度		
1822-22	1層壁	壺	北溝溝 (土層)	褐色色シト	内面: ナメのり1.5mm, 筒オヤス 内面: ナガ, 1.5mm	30	160	1層壁1.4	内面: 2.5Y 6.6 褐色 内面: 2.5Y 6.6 褐色		
1822-23	灰褐色磁器	杯	落ち山A (土層)	褐色色シト	内面: 同軸ヘラタズリ, 同軸ナガ 内面: 同軸ナガ, ナガ	15	44	全体の1.2	内面: N 2 黄色 内面: N 2 黄色	自然黒付着	
1822-24	灰褐色磁器	杯	落ち山A (土層)	褐色色シト	内面: 同軸ヘラタズリ, 同軸ナガ 内面: 同軸ナガ	12	123	1層1.3	内面: N 2 黄色 内面: N 5 - 6 灰褐色		
1822-25	灰褐色磁器	落ち山A (土層)	灰白色磁器	内面: ココナテ, 1.5mm 内面: ココナテ	10	157	1層壁1.11	内面: 2.5Y 6.2 灰褐色, N 5 黄色 内面: N 5 黄色	内面に黒付着		
1822-26	灰褐色磁器	落ち山A (土層)	灰白色磁器	内面: ナメのり1.5mm, 筒オヤス 内面: ナガ	最大長 65	最大幅 50	5%		内面: 10YR 6.2 灰褐色, N 5 黄色 内面: 10YR 7.5 黄色	内面に黒付着	
1822-27	灰褐色磁器	落ち山A (土層)	灰白色磁器	内面: 同軸ナガ 内面: 同軸ナガ	最大長 62	最大幅 63	5%		内面: N 6 黄色 内面: N 6 黄色	内面に黒付着	
1822-28	灰褐色磁器	壺	落ち山A (土層)	褐色色シト	内面: 同軸ヘラタズリ, 同軸ナガ 内面: 同軸ナガ	68	61	注1) 不明	内面: N 6 - 5 灰褐色 内面: N 6 - 5 灰褐色		
1822-29	灰褐色磁器	有蓋 高坪	落ち山A (土層)	褐色色シト	内面: 同軸ナガ, 同軸ヘラタズリ 内面: 同軸ナガ, ナガ	142	136	注1) 不明	内面: N 2 黄色 内面: N 6 黄色	3方向の長方形溝2段 特異な縦線状自然黒付着	
1822-30	灰褐色磁器	有蓋 高坪	落ち山A (土層)	褐色色シト	内面: 同軸ナガ, 同軸ヘラタズリ 内面: 同軸ナガ, ナガ	133	114	注1) 不明	内面: N 2 黄色, 灰褐色, N 5 黄色 内面: N 2 黄色	長方形の溝1.2段 3方向の溝	
1822-31	灰褐色磁器	高坪	落ち山A (土層)	褐色色シト	内面: 同軸ナガ, ナガ 内面: 同軸ナガ, ナガ	118	118	側壁1.02	内面: N 6 - 5 灰褐色, 内面: N 5 黄色 内面: N 6 黄色	底面に縦線状自然黒付着	
1822-32	灰褐色磁器	無蓋 高坪	落ち山A (土層)	褐色色シト	内面: 同軸ナガ, 同軸ナガ, 同軸ヘラタズリ 内面: 同軸ナガ, ナガ	124	122	1層壁1.2 側壁1.4%	内面: N 5 黄色 内面: N 5 黄色	長方形の溝1.2段 3方向の溝	
1822-33	灰褐色磁器	高坪	落ち山A (土層)	灰白色磁器	内面: 同軸ナガ, 同軸ヘラタズリ, ナガ 内面: 同軸ナガ	100	116	側壁1-底壁 100%	内面: N 6 - 5 灰褐色 内面: N 6 黄色		
1822-34	灰褐色磁器	高坪	落ち山A (土層)	灰白色磁器	内面: 同軸ナガ 内面: 同軸ナガ	68	140	1層壁1.3	内面: N 6 黄色 内面: N 6 黄色		
1822-35	灰褐色磁器	壺	北溝溝 (土層)	褐色色シト	内面: ナメのり1.5mm, 筒オヤス 内面: ナメのり1.5mm, 筒オヤス	164	110	1層壁1.5	内面: N 6 黄色 内面: N 6 黄色		
1822-36	灰褐色磁器	高坪	落ち山A (土層)	褐色色シト	内面: 同軸ナガ, ナガ 内面: 同軸ナガ	66	110	1層壁1.2	内面: N 2 黄色 内面: 2.5Y 6.1 黄色 2.5mm 程度	自然黒付着	
1822-37	灰褐色磁器	壺	北溝溝 (土層)	褐色色シト	内面: 同軸ヘラタズリ, 内面 内面: 同軸ナガ	160	180	1層壁1.2	内面: 2.5Y 6.1 灰白色 2.5mm 内面: N 2 灰白色 2.5mm	2.5Y 6.1 暗褐色, 自然黒付着	
1822-38	灰褐色磁器	西可堂 (土層)	北溝溝 (土層)	褐色色シト	内面: 同軸ナガ, 同軸ヘラタズリ 内面: 同軸ナガ		113	側壁1.5	内面: 10Y 灰褐色 2.5 黄色 内面: N 2 灰白色	自然黒付着	

表3 纏向遺跡第189次調査 出土土物観察表②

図版番号	種別	種類	地区・遺跡	層位	注目 物	法量 (cm)		保存	色調	備考	
						口径	高さ (内径)				
図28-39	灰皿類	変	落ち込み (19層)	黒褐色シキリ	内周：凹形ヘラケズリ、凹形ナデ、ナデ 内底：凹形ナデ	124	19.0	底面-敷面同	内周：N 6・灰色 内底：S 6・3 褐色	裏面に遺灰を覆けようとした跡跡3方向にあり 内底に自然粘付着	
図28-40	灰皿類	変	変 西層	上層	内周：凹形ヘラケズリ、ナデ 内底：凹形ナデ	11.8	19.0	底面2・4 壁3層1.8	内周縁とも変? 灰白色とN 6・灰色の中 褐色	裏面に遺灰を覆けようとした跡跡3方向にあり 内底に自然粘付着	
図28-41	石製品	石片?	落ち込み (19層)	灰褐色 磨擦・丸磨	—	5.3 4.9	12.0	—	—	—	
図28-42	土製品	土高	変 (19層)	—	—	最大径 3.3	最大径 2.8	—	23層3.0 2.0に灰褐色	—	
図28-43	土製品	土高	変 (19層)	—	—	最大径 3.2	最大径 2.7	—	19層3.0 2.0に灰褐色	—	
図28-44	土製品	小形 丸底蓋	落ち込み (7層)	灰黄色丸磨	内周：ヨコジギ 内底：ヨコジギ4の丸ナデ1.6ナデ、ナデ	11	11.0	1層蓋1.4	内周縁とも19層3.0に灰褐色と2.0 灰黄色と2.0にナデ1.6ナデ	—	
図27-43	輪郭1	落ち込み (12層)	壁ナデ	—	—	最大径 3.4	最大径 3.2	1.5	—	内周：2.5層7.0 灰白色、7.2 灰黄色 内底：3層5.0 褐色	
図27-44	輪郭1	落ち込み (12層)	壁ナデ	—	—	最大径 3.0	最大径 3.3	1.2	—	内周：2.5層7.0 褐色 内底：2.5層7.0 褐色	
図27-47	輪郭1	落ち込み (19層)	色紙土	—	—	最大径 4.0	最大径 4.8	2.5	—	内周：2.5層7.0 褐色、3層5.0に灰褐色 内底：N 4・灰褐色、2.5層7.0に灰褐色	粘付着
図27-48	輪郭1	変 (19層)	—	—	—	最大径 3.0	最大径 3.1	1.5	—	内周：2.5層6.0 褐色 内底：2.5層6.4 2.0に灰褐色	粘付着
図27-49	輪郭1	変 (19層)	—	—	—	最大径 2.8	最大径 3.1	1.0	—	内周：3.0層4.3 褐色 内底：2.5層6.4 2.0に灰褐色	粘付着
図27-50	輪郭1	落ち込み (19層)	黒褐色シキリ	—	—	最大径 3.4	最大径 3.5	1.1	—	内周：N 6・灰褐色 内底：2.5層7.0に灰褐色	—
図27-51	輪郭1	落ち込み (19層)	黒褐色シキリ	—	—	最大径 2.4	最大径 3.3	1.0	—	内周：N 6・灰褐色 内底：2.5層7.0に灰褐色	—
図27-52	灰皿	4角	落ち込み (19層)	黄灰色丸磨	—	最大径 3.3	最大径 3.0	0.6	—	N 2・灰色	土の塊の中にあった

表4 纏向遺跡第189次調査 出土鉄滓一覧表

図版番号	出土位置・層位	長径 (cm)	短径 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	備考
図28-53	北半 金気の強い層 (暗褐色粗砂層)	8.6	5.3	1.5	119	砂粒付着
図28-54	落ち込み 上層 (暗オリーブ褐色粘土)	6.9	6.5	2.3	96	砂粒付着
図28-55	落ち込み 上層 (暗オリーブ褐色粘土)	2.4	2.3	1.9	10	
図28-56	北半 一段落し (落ち込み 中層)	4.6	3.3	2.5	55	
図28-57	北半 一段落し (落ち込み 中層)	3.4	2.3	1.3	28	
図28-58	東半 一段落し (落ち込み 中層)	4.3	4.3	2.2	60	
図28-59	東半 一段落し (落ち込み 中層)	8.0	7.0	2.4	150	砂粒付着
図28-60	東半 一段落し (落ち込み 中層)	6.0	4.9	2.2	66	砂粒付着
図28-61	東半 一段落し (落ち込み 中層)	5.7	4.3	2.6	70	
図29-62	落ち込み 中層 (鉄滓集中部)	6.1	5.5	1.9	96	砂粒付着
図29-63	落ち込み 中層 (土器割付近)	5.3	4.2	2.3	42	
図29-64	北西隅 落ち込み 中層	5.5	4.2	2.3	51	
図29-65	中層	5.3	4.5	2.0	69	
図29-66	中層	4.1	3.15	1.6	24	
図29-67	中層	4.5	4.0	1.1	26	
図29-68	落ち込み 中層 (黄灰色礫層)	5.7	5.2	2.1	67	砂粒付着
図29-69	落ち込み 中層 (黄灰色礫層)	4.9	4.5	1.5	28	
図29-70	落ち込み 中層 (黄灰色礫層)	6.5	6.4	1.8	129	砂粒付着

第4節 纏向遺跡第190次（茶ノ木塚古墳第1次）発掘調査概要報告

1. はじめに

纏向遺跡第190次調査は、桜井市大字箸中652、653において、農地造成に先立っておこなわれた。箸中地域は古墳時代の大規模集落遺跡である纏向遺跡の南半部に位置し、纏向遺跡に重複して展開する纏向古墳群のなかでも特に古墳が集中して築かれた地区である。調査地およびその周辺は、現在は水田や畑作地となっているが、調査地には茶ノ木塚古墳と呼ばれる古墳の墳丘が高まりとして残存している。近隣の耕作地にも同様の高まりが複数見られ、また調査地の南約100mにはホケノ山古墳や堂ノ後古墳、南西約250mには箸墓古墳が存在している（図31、図36）。

今回の調査は、調査地に残存する茶ノ木塚古墳の形態や築造時期の確認を主目的として実施された。調査期間は平成29年2月7日～3月3日であり、調査面積は約26㎡である。なお発掘調査に先立ち、古墳および周辺地形の3次元レーザー測量を平成28年12月に実施している。

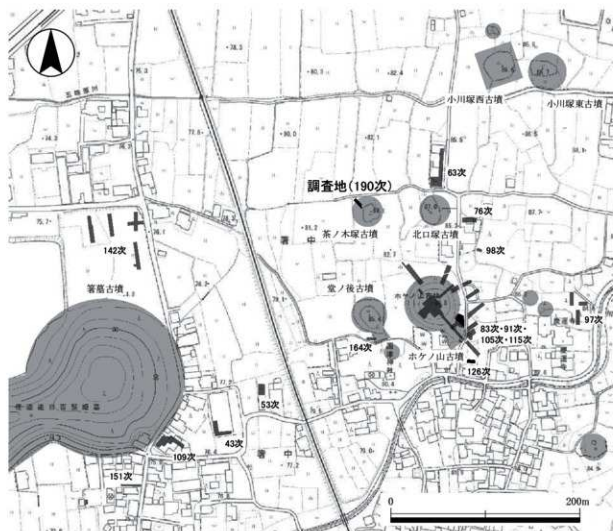


図31 纏向遺跡第190次調査地位置図 (S=1/4,000)

2. 茶ノ木塚古墳の現状

茶ノ木塚古墳は瀬向川の北岸に広がる緩傾斜地に立地する。現在は水田の中に、南北21.8m、東西20.3mを測る不整形の高まりが残存している（図32）。近年まで畑作地であった高まりの上面には標高84.0m前後の平坦面が存在し、周囲の水田面からの高さは、盆地側にあたる西側で約1.8m、山側にあたる東側では1.4m前後と低平であり、こうした高まりの形状から墳丘が後世に大きく改変されていることが容易に想像された。また高まりでは石材や土器片が散見されているが、その量は少なく、これらが葺石の存在や築造時期を示すものとは判断できなかった。

なお茶ノ木塚古墳では、今回の調査以前に発掘調査が実施されたことはないが、平成14年に天理大学歴史研究会によって測量調査と地中レーダー探査がおこなわれている。レーダー探査では高まりの西側から南側にかけて葺石の存在や溝状遺構の存在を示すような応答があり、その成果から幅約9mの周濠をもつ径約28mの円墳とする復元案が提示されている¹⁾。

3. 調査の方法と層序

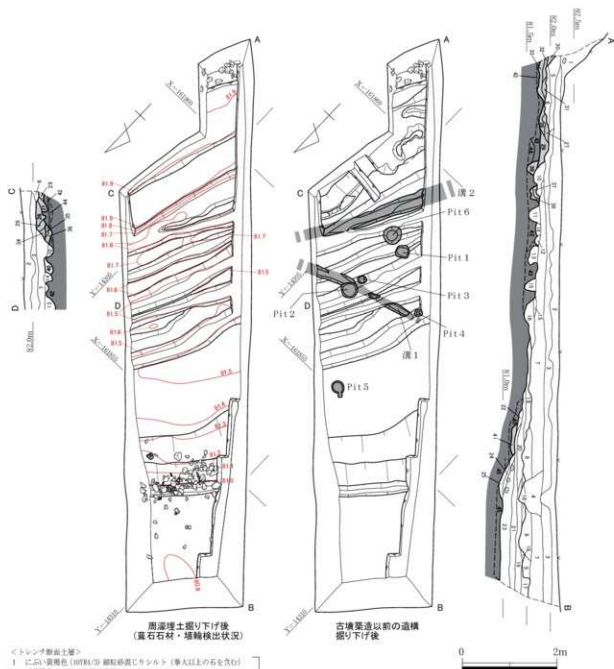
茶ノ木塚古墳の北西側墳丘端の位置と周濠の状況を確認することを目的として、高まりの北西側に幅2.5m、長さ約10mのトレンチを設定し調査を開始した。現地表面よりバックホーにて耕作土を掘削したところ、北西側ほど耕作土が厚く存在することがわかり、高まりに近い南東側では地表下約30cmで墳丘盛土（図33-26～34層）が、トレンチ中ほどでは地表下約50cmで基盤層（42・43層）が、トレンチ北西端近くでは地表下約60cmで周濠の最上層埋土（17・18層）が、それぞれ耕作土の直下で検出されている。その後人力により精査および遺構埋土の掘り下げをおこない、さらに墳丘盛土層の確認のためトレンチ南東端を拡張している。これによりトレンチ南西壁の延長は約12mとなり、最終的なトレンチ面積は約26㎡となった。

4. 検出された遺構

墳丘端と周濠 トレンチの北西部分において、黒褐色粘質土（図33-23層）などが堆積する落ち込みが確認されている。この落ち込みは基盤層を80～90cmの深さで掘り込んでおり、高まりとの位置関係から考えると、茶ノ木塚古墳の墳丘の北西側を巡る周濠と判断することができる。外側の肩は検出されていないため、周濠幅は明らかとなっていない。

周濠底面は概ね平坦で、トレンチ北西端より南東へ約2.6mの地点で基盤層が立ち上がる状況が確認されており、この位置を北西側の墳丘端とすることができる。墳丘端ラインは概ね南西―北東方向へと続いており、これに沿う周濠底面では、幅20cm余り、深さ数cmの小規模な溝状の凹みが観察された。

葺石の状況 墳丘端付近には古墳築造後の早い段階に流れ込んだと考えられる砂礫層（図33-24層）が存在し、その上面で拳大程度の石が埴輪片とともに多数検出されている（図版32）。石は拳大から20cm前後の川原石で、上方の墳丘斜面の葺石が流れ落ちたものと考えられる。いっぽう墳丘端付近の斜面の基盤層直上では、原位置にある葺石は一切確認されておらず、周濠底面に流れ落ちたような



＜トレンチ断面土層＞

- 1 濃い黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト (準大以上の石を含む)
- 2 灰褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト
- 3 濃い黄褐色 (10YR5/2) 細粒砂混じりシルト (Fe沈着)
- 4 オリーブ褐色 (2.5Y5/4) 細粒砂混じりシルト (42のブロックを5%含む)
- 5 褐色 (10YR4/1) 細粒砂混じりシルト (小礫を含む)
- 6 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細～粗粒砂混じりシルト (Fe沈着)
- 7 オリーブ褐色 (2.5Y5/4) 細粒砂混じりシルト (Fe少量沈着)
- 8 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細粒砂混じり粗質シルト (Fe少量沈着)
- 9 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細粒砂混じり粗質シルト (42のブロックを20%含む)
- 10 濃い黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト (径3mm～3cmの礫を含む)
- 11 濃い黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト (42のブロックを3%含む)
- 12 濃い黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト (42のブロックを2%含む)
- 13 濃い黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト (42のブロックを5%含む)
- 14 濃い黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト (暗褐色土を2%含む)
- 15 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細粒砂混じり粗質シルト (小礫を含む) Fe少量沈着)
- 16 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細粒砂混じり粗質シルト (小礫を含む) Fe少量沈着)
- 17 灰黄色 (10YR4/2) 粘質シルト (径3mm程度の礫を含む)
- 18 灰黄色 (10YR4/2) シルト混じり細～粗粒砂 (径5cm以下の礫を含む)
- 19 灰褐色 (2.5Y5/2) 粘質シルト (径3mm程度の礫を含む)
- 20 灰褐色 (2.5Y5/2) 細粒砂混じり粘質シルト (径3mm程度の礫を多く含む)
- 21 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質シルト (径5cm以下の礫を含む) Fe沈着)
- 22 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質シルト (42のブロックを5%含む)
- 23 灰褐色 (2.5Y5/1) 粘質シルト (径5mm～準大の礫を含む)
- 24 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質シルト
- 25 灰黄色 (2.5Y4/1) 粘土シルト (42のブロックを3%含む)

- 26 濃い黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト (小礫を含む)
- 27 黒褐色 (10YR2/1) シルト (42のブロックを1%含む) 土層断片多量)
- 28 濃い黄褐色 (10YR5/4) シルト (小礫、暗灰黄色土ブロックを1%含む)
- 29 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト～細粒砂 (礫含む) Feわずかに沈着)
- 30 黒褐色 (10YR2/1) 粘質シルト (Feわずかに沈着)
- 31 灰褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト (42のブロックを20%含む)
- 32 灰黄色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト (42のブロックを5%含む)
- 33 灰黄色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト (42のブロックを10%含む)
- 34 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト混じり細粒砂 (42のブロックを10%含む)
- 35 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト混じり細粒砂 (42のブロックを20%含む)
- 36 黄褐色 (2.5Y5/3) 細粒砂混じりシルト (小礫を含む) Fe沈着)
- 37 黄褐色 (2.5Y5/3) 細粒砂混じりシルト (小礫を含む)
- 38 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質シルト (礫を含む)
- 39 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト (42～44のブロックを20%含む)
- 40 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (42のブロックを10%含む) [溝1埋土]
- 41 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト混じり粗粒砂
- 42 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト～粗粒砂 (小礫をわずかに含む)
- 43 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト～粗粒砂 (小礫を含む) Fe少量沈着)
- 44 黄褐色 (2.5Y5/4) 細粒砂混じりシルト (径10cm以下の礫を含む) [系層埋]
- 45 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質シルト (細粒砂～径10cmの礫で構成 オリーブ灰色シルトを含む)

図33 トレンチ平面・断面図 (S=1/80)

石もそれほど多くはない。このことから、墳丘端付近の斜面には当初より葺石が存在しなかったと推定される。なお葺石に由来すると考えられる石は、トレンチ南東端の拡張部の耕作土中においても検出されている。

墳丘盛土 高まりに近いトレンチ南東端付近の基盤層直上において、墳丘盛土と考えられる土層が確認されている。盛土はトレンチ内では厚さ20～30cmほど残存しており、基盤層のシルトブロックを多く含む土層（図33～30～34層）のほか、古式土師器片を含む黒褐色土層（27層）などで構成されていた。なおこの黒褐色土層は、当初耕作土の直下で南北方向に帯状に広がる状況が確認されたため、古墳築造後の溝状遺構の埋土とも考えられた。しかし掘削の結果、黒褐色土から出土した多くの土器片は古墳に先行する時期のものに限られており、また下面の凹凸が激しく、部分的には黄褐色の盛土層（29層）の下にもぐり込むような箇所も見られたことから、溝のような遺構の埋土ではなく、墳丘盛土である蓋然性が高いと考えている。

その他の遺構 中世以降の耕作に伴う素掘溝のほか、溝や小規模なピットが基盤層上面で検出されている（図33右）。これらはいずれも古式土師器の小片が出土するのみであり、詳細な時期は不明であるが、基盤層上面に厚く存在したであろう盛土の上面から切り込まれたものとは考えにくく、古墳築造以前の遺構である可能性が高いと判断される。なおこれらの遺構のうち溝2については、埋土の状況が墳丘盛土に近似していることから、墳丘築造時に埋められたものである可能性も考えられる。

5. 出土遺物の概要

遺物の概要 コンテナケースで3箱分の遺物が出土した。大半は茶ノ木塚古墳に伴う埴輪で占められ、周濠埋土中や耕作土中より出土している。次いで多いのは廻向遺跡の古墳時代集落に伴うものと考えられる古墳時代前期の土師器で、おおよそ布留式古相段階に位置付けられ、主に墳丘盛土中や周濠埋土中より出土している。それ以外では須恵器や瓦器、陶器などがわずかに確認されている。

現在これらの遺物は整理作業中であり、全てをここに報告することはできない。以下では茶ノ木塚古墳の性格を考える上で鍵となる埴輪の状況について、現段階で判明していることを示すこととしたい。

埴輪の概要 出土した埴輪の大半は円筒埴輪であり、それ以外には朝顔形埴輪や蓋形埴輪が確認されている。須恵質の埴輪は含まれていないが、黒斑を有するものはなく、いずれも窯室焼成であると考えられる。

円筒埴輪は全体形状を復元できる個体はなく、底部高や突帯間隔がわかるものも存在しない。底部径は約24cmに復元できる個体などを確認している。比較的器壁の厚みがある個体が多い印象であり、2次調整が施されない個体が目立つものの、B種ヨコハケを持つ個体も一定量存在する。

蓋形埴輪は立ち飾り部の破片が数点出土している（図34）。色調や調整等に違いがあるため、全てが同一個体であるとは考えられないが、これらからおおよそ立ち飾り部の全体像を推定することができる（図35）。飾り板の頂辺が弧を描く形状であり（1・2）、文様は縦帯がなく、2列以上の二線帯を

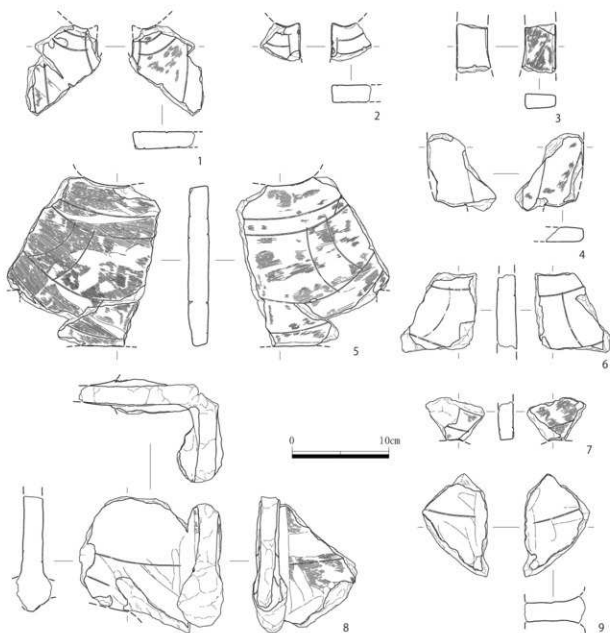


図34 蓋形埴輪 (S=1/4)

持つ(1・2・5・6などから)。外側の辧は上下2段存在し、上辧の下端はS字状をなすことがわかる(4)。飾り板の下端部には、飾り板受部の剝離痕がみとめられる(8・9)。こうした立ち飾り部の形状は、小栗明彦氏による分類のⅡe型式にあたるものである²⁾。

6. 茶ノ木塚古墳の形態と時期

古墳の形態 今回の調査では、墳丘の北西端の位置と周濠の存在を確認することができた。また確認された墳丘端は現況の高まりの端から8m余り離れた位置にあり、墳丘の周囲が後世に大きく削平されていることが明らかとなった。墳形の確認は今後の課題であるが、高まりと墳丘端の位置関係

から、墳丘規模は30m前後かそれ以上である可能性が高いと考えられる。このほか墳丘端付近で石材が集積して検出されたことにより、葺石の存在が明らかとなった。ただし石材はいずれも原位置を保つものではなく、詳細な葺石の状況の解明は今後の調査に委ねられるところである。

なお、上記の遺構や石材が検出された位置や現地表面からの深度は、過去に天理大学歴史研究会によ

って実施された地中レーダー探査の成果とはほぼ合致するものであった。今後茶ノ木塚古墳において発掘調査を計画する際には、この探査成果を参考にすることが有効であると考えられる。

築造時期 詳細な時期の検討は整理作業や今後の調査成果を待った上で行うこととしたが、埴輪が出土したことにより、おおよその時期を推定することが可能となっている。今回図示することができた蓋形埴輪は、5世紀後半頃の古墳出土例にみとめられる小果分類のⅡe型式にあたるものであった。円筒埴輪の形態についても同様の時期とみて矛盾がないことから、現状では茶ノ木塚古墳の築造時期は5世紀後半頃と考えておきたい。

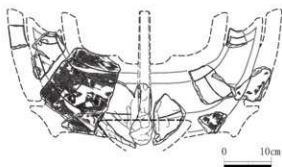


図35 蓋形埴輪立ち飾り部推定復元図 (S=1/8)

7. まとめ

今回の調査は茶ノ木塚古墳におけるはじめての発掘調査であり、古墳に関するいくつかの新知見を得ることができた。その中でも特に以下の2点は、纏向古墳群の様相を考える上で注意される点として挙げられる。

まず第一点目は、築造時期の推定が可能となった点である。茶ノ木塚古墳が含まれる纏向古墳群は50基以上の様々な規模・時期の古墳で構成されている。箸墓古墳や纏向石塚古墳など3世紀代の大型前方後円墳の存在が際立ついっぽうで、5世紀後半～6世紀前半頃に再び造墓活動が活発化し、3世紀代の大型墳に近接してこの時期の中小規模墳が多数築造されることが知られている³⁾。茶ノ木塚古墳はこのうち後者の時期に属することが明らかとなり、詳細な時期は今後検討が必要であるが、6世紀代に下る可能性は低いと考えられ、後者の中でも比較的早い段階に築造された古墳であると思われる。纏向古墳群での造墓活動の変遷を考える上での新資料であり、今後の調査や整理作業の過程で築造時期を慎重に検討していきたい。

第二点目としては、北西側の墳丘端が確認されたことにより、墳丘規模を推定する上での手掛かりが得られたことが挙げられる。墳丘形態を推定する根拠は依然として乏しいが、墳丘規模は30m前後かそれ以上である可能性が高く、さらに東側も同程度の削平を受けていると仮定するならば、その規模は40mに達する可能性も考えられる。先述のように纏向古墳群には5世紀後半～6世紀前半の中小規模墳が多くみられるが、大きな傾向として北西部の大字東田・辻付近では20m前後かそれ以下の小規模墳が築造され、南東部の大字著中付近ではそうした小規模墳に加えて、全長40m前後かそれ以上

写真図版

調査前状況(北西より)



調査区完掘状況
(北西より)



北壁断面(西より)





第1トレンチ
南北調査区 完掘状況
(北より)



第1トレンチ
東西調査区 完掘状況
(東より)



第1トレンチ東西調査区
と第2トレンチ完掘状況
(東より)



第2トレンチ
遺構検出状況
(北東より)



第2トレンチ
完掘状況(北東より)



第2トレンチ
遺構検出状況(北より)



第2トレンチ
完掘状況(南西より)



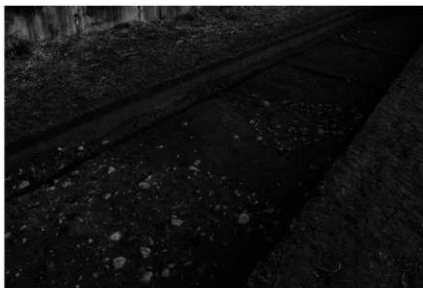
SK105検出状況
(南西より)



SK105断面①
(南西より)



SD106・107完掘状況(南より)



SK117検出状況(北西より)



SK117断面②(南西より)



SD103とSK117
完掘状況(北東より)



SD137検出状況
(東より)



SD137遺物出土状況
(北より)



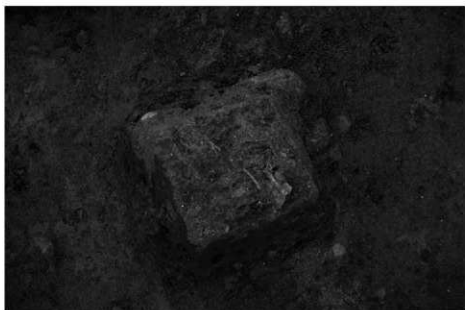
SD137断面③(北より)



SD137断面④(西より)



SD139検出状況
(東より)



SD139馬首出土状況
(真上より)



SD139断面⑤ (西より)



SD139とSP143断面⑥
(西より)



SX140検出状況
(西より)



SX140半裁断面
(南より)



SX146検出状況
(北西より)



SX153検出状況
(南西より)



SD150・162検出状況
(西より)



SD150検出状況
(西より)



SD150・162完掘状況
(西より)



SD150断面⑦(東より)



SD150・162断面⑧
(東より)



SD160断面⑩ (西より)



SD170断面⑪ (北より)



SD170断面⑫ (南より)



SK171断面図(西より)



SP130・131・133
検出状況(北より)



SP156・159検出状況
(北より)



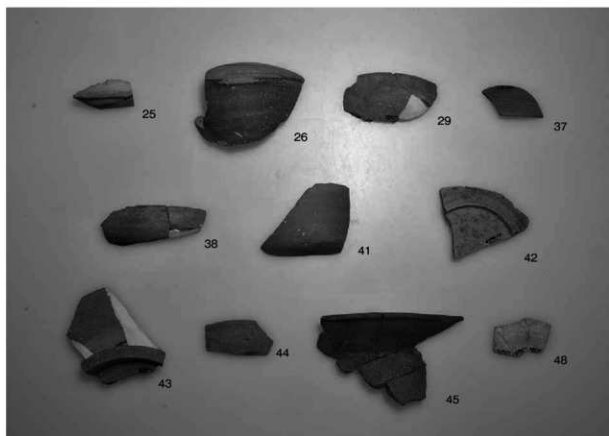
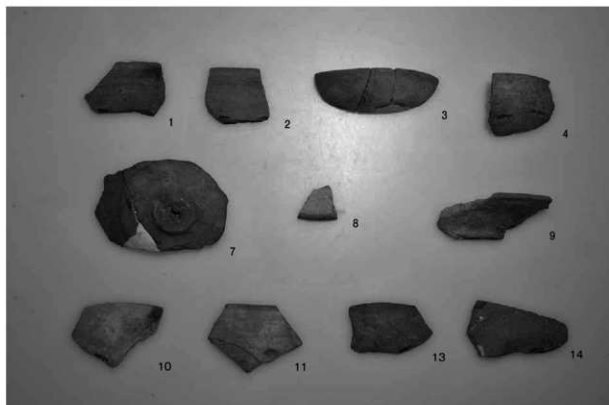
SP156断面⑨ (西より)



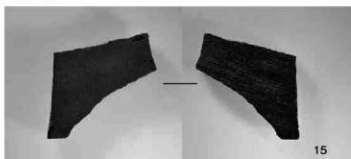
SP159断面⑨ (西より)

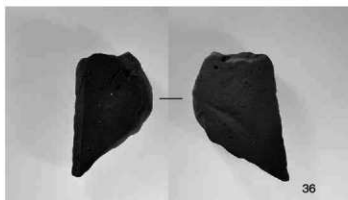
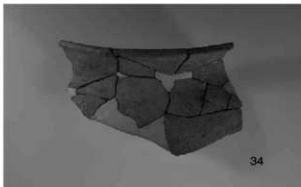
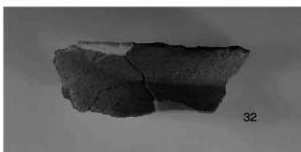


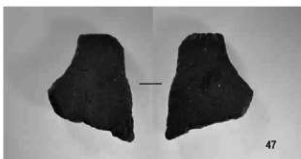
SP172断面⑨ (南より)



出土遺物①







出土遺物①



馬歯



調査前状況 (東より)



調査区全景 (北より)



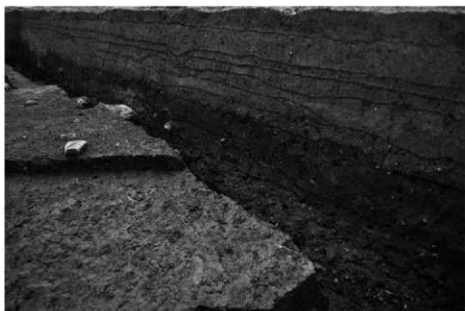
北壁断面 (東より)



南壁断面 (西より)



東壁断面 (南より)



西壁断面 (北より)



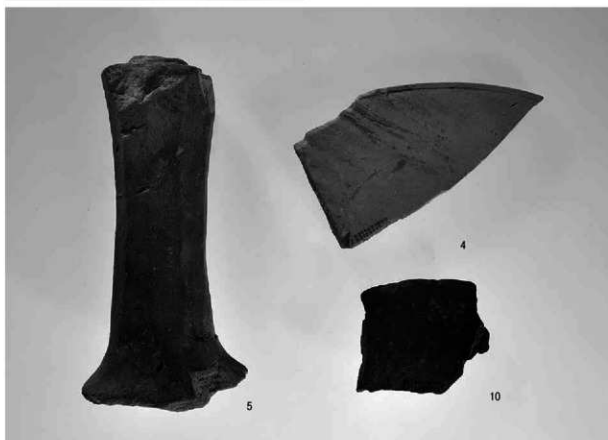
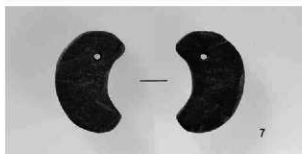
落ち込み断面
(北西より)



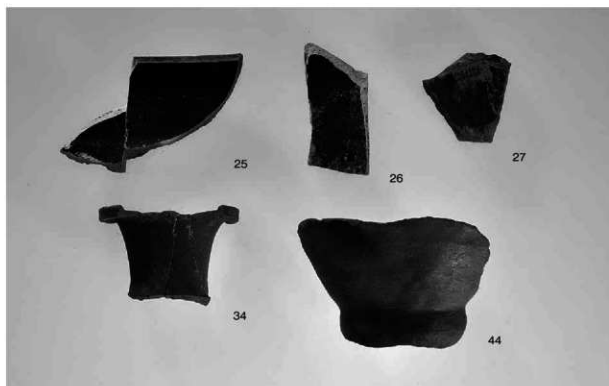
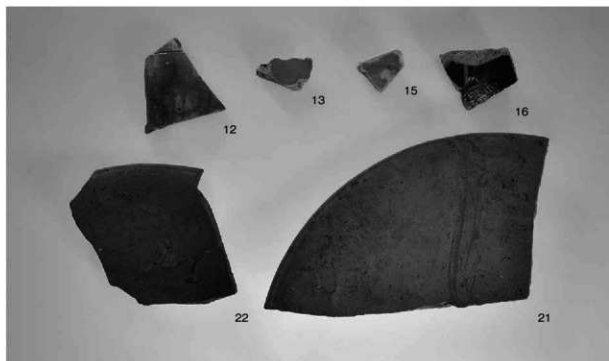
落ち込み断面
(北東より)



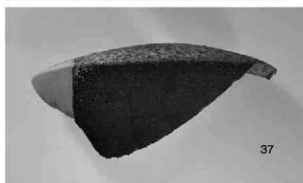
落ち込み中層
土器出土状況
(南西より)

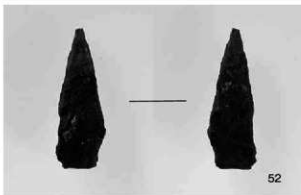
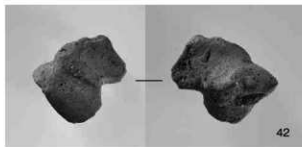
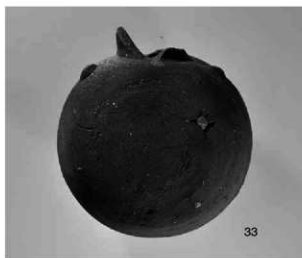


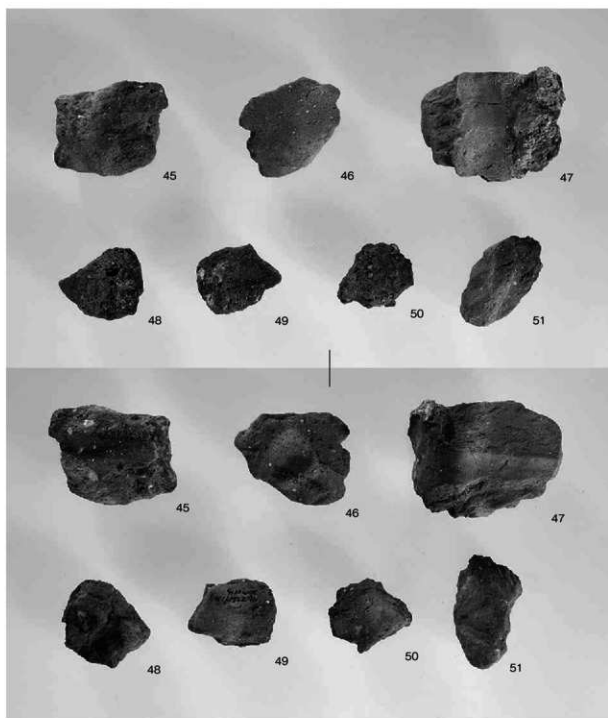




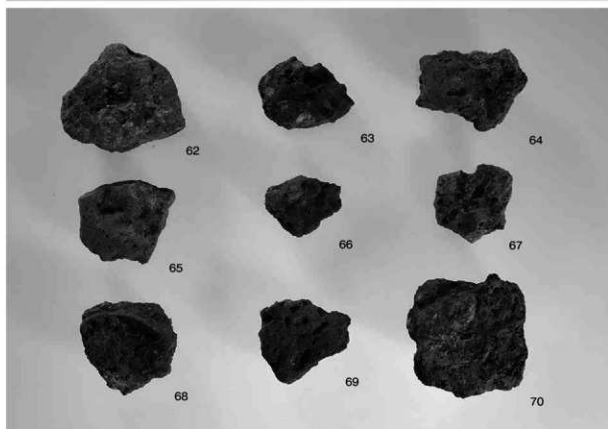
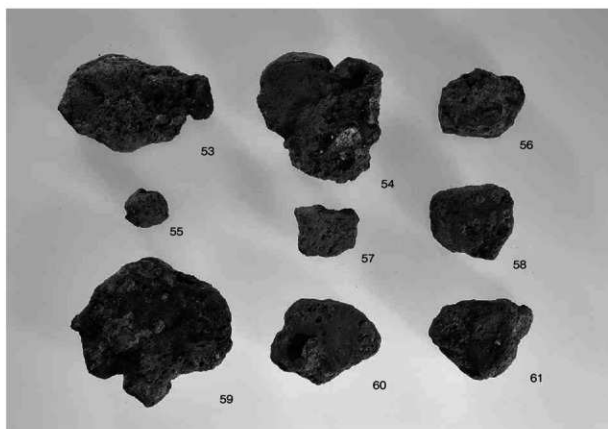
出土遺物③







出土遺物⑥





箸中地域の古墳と三輪山（北西より）



調査地全景（上が北）



茶ノ本塚古墳と調査トレンチ①(上が北)



茶ノ本塚古墳と調査トレンチ②(北西より)



周濠上面検出状況
(北西より)



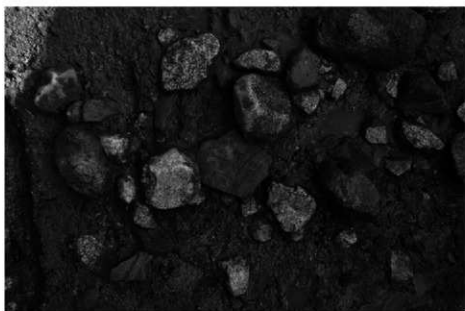
葺石石材・埴輪検出状況①
(北西より)



周濠埋土完掘後
(北西より)



葺石石材・埴輪
検出状況②(北西より)



葺石石材・埴輪
検出状況③(左下が北)



周濠埋土断面(北より)

報告書抄録

書名	桜井市 平成28年度国庫補助による発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第48集
執筆者名	福辻 淳、丹羽恵二、三沢朋未（編集）
編集機関	桜井市教育委員会文化財課
所在地	〒633-0074 奈良県桜井市芝58-2 TEL 0744-42-6005 FAX 0744-42-1366
発行年月日	2018年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大藤原京関連遺跡第65次	桜井市 山田2028	292061	14C-0576	34° 48' 55"	135° 83' 32"	20161004	28㎡	個人住宅建築に伴う発掘調査
吉備池遺跡第17次	桜井市 橋本40・41	292061	14B-0024	34° 50' 39"	135° 83' 29"	20161226～ 20170218	364.5㎡	範囲確認調査
纏向遺跡第189次	桜井市巻野内 390	292061	11D-0487	34° 32' 35"	135° 50' 44"	20170110～ 20170206	100㎡	個人住宅建築に伴う発掘調査
纏向遺跡第190次(茶ノ木塚古墳第1次)	桜井市箸中 652、653	292061	11D-0487	34° 32' 26"	135° 50' 39"	20170207～ 20170303	26㎡	農地造成に伴う発掘調査

桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書 第48集

桜井市

平成28年度国庫補助による
発掘調査報告書

発行 桜井市教育委員会
文 化 財 課

〒633-0074 奈良県桜井市大字芝58-2番地

TEL 0744-42-6005

FAX 0744-42-1366

年月日 2018年3月30日

印刷 株式会社明新社

〒630-8141 奈良市南京終町3-464